にはあらでといふ心也。ほに出るとはあらはるる事をいふ。ほいにはあらでは忍びてといふ義也。又本意にはあらでといへり。それもうはきえすれども、唯あらはにはあらでといふ方まされるにやとあり。愚に、ほいは本意也。ほいにはあらでは思の外なる心也。かねては是程迄は思はざりしが、深切になりたるをほいにはあらで志ふかかりといへり。

一人ゆきとぶらひけるを　　業平密通の事也。

一む月の十日ばかりの程に外にかくれにけり　　或人抄に、む月は睦月とも、又親月ともかくといへり。萬葉にむ月といふ歌は二首あり。皆假名書也。和名に又無之不審云云。む月は正月の事なり。外にかくれにけりとは、密通をばばかりて女他所へうつるなり。其在所をば知れども、行きて尋ねむよすがもなし。又愚の一説に、女御に立給ひてうちにまゐり給ふを、外にかくれけりともいふべし。

一梅の花さかりに　　あながち其所の梅にてはなくとも、世間のさかりなるべし。稱抄。

一なほうしと思ひつつ　　つつといふ詞にてほどふる心あり。

一こぞをこひて　　去年のこの比までは、西の對までまゐりし物と思出せるなり。

一たちて見ゐて見みれど　　見はやすめ辭也。ふり見ふらず見と同じ。

一あばらなるいたじき　　おちあれたるやうにもあるか。又あながちさはなくとも、人のすまず主人のなき所はあれねども、あれたるやうなる物なり。業平の心に、其人のなければ、あれたるやにおぼゆるなるべし。

一月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつは本の身にして　　業平歌におきては言語道斷の秀歌也。月やあらぬとは月をとがめて、月は去年の月にてはなきか、春は昔の春にてはなきかと、春をもとがめ、更に去年に似ざるは何としたる事ぞといふ心也。下句を後成恩寺、我身ひとつは本のままにてとありとしるせり。それは此歌に餘情なきなり。我も本の身にては

なきかと思へるが、我身はもとの身にてあるよと、かく見るべきなり。師說に、我身ひとつといふは、の字をすてて見よといへり。俊成卿は歌の事をいへるには、彼の月やあらぬ、結ぶ手の、此兩首ならでは、歌の事には本とは思はれぬなりと云云。物ごとに書載せて勘し給へるといへり。又古今に貫之の物語の言葉を其儘長長と書入れたる、此物語の名譽也。

一とよ見て夜のほのぼのあくるまでゐたるなり。　とよんでと讀むべし。以下倣之。心をとめて夜ここに心をとむる程に、夜のほのぼのと明くるまでゐて、いつまでここにあるべきぞとて、なくなくかへるなり。

一五 昔男ありけり東の五條わたり　上にいへると同處也。

一いと忍びていきけりみそかなる處なれば　忍びてとは二條の后に密通の事也。みそかは隱密したる處也。

一ついぢのくづれより　ついぢはついがきなり。門よりもえいらずして、あらぬ道を求めて通ふなり。稱名抄には、ついひぢをついぢとよむなり。古今にはかきのくづれと書きかへたる奇特也と云云。愚見に、草刈わらはべなどの道にしたる心なり。かやうにあれたる故なれば、上にあばらなる板敷といへりと云云。

一あるじ　染殿后也。

一人しれぬわが通路の關守はよひよひごとにうちも寐ななむ　心につよく侘びていへるところあり。あはれなる歌也。うちも寐ななむは打も寐よかし也。

一いといたう心やみけり　染殿后の、あはれと思ひて業平を憐愍の心あるなり。

二條后にといふより以下、物語の作者の詞也。

一せうとたち　愚見に、二條の后のせうとたちは、右大臣基經公大納言國經卿などなり。これも內へまゐり給はぬさきの事なるべし。

六

一女のえうまじかりけるを　得がたき女也。二條后の事也。愚に、此女は二條の后いまだわかくましまして、御いとこの染殿の后の女御と申して、文德の內裏にましましける時、二條の后ただ人にてつかうまつり給ひしを、中將ぬすみ出でたるをいふ。えうまじかりけるは、えがたきなり。ぬすみ得がたき心なるべし。或抄に、からうじては辛勞するなりといへり。私云、源氏物語などにはやうやうとしてといふ心なり。此心猶可然也。道、面白くして女を盗出でて行くと云云。

一あくた川　愚に、あくた川といふは攝津國の名所也。これはそれにては侍るまじ。道筆に、作物語なれば、禁中のあくたながす川などいふ義にも及ばず。唯あくた川といふ河にてとくべしと云云。稱名抄には內裡の內といふ、さもあるべき歟。古注也。此段つくり物語也とみるべし。

一ゐていきければ　ひきゐて行く也。つれてゆく心也。

一草の上におきたる露を　夜ふかくかかる道など見たまへし事なければ、露を何ぞとなむ問ひたまへり。

一行くさきおほく　行路の遠きをいふ。

一おにある所　下の詞書に見えたり。

一あばらなるくら　愚に、あれたる所也。座といふ字くらと讀む。大極殿の高御座をばたかみくらとよめり。官廳をいふといふ說あり。證據なきなり。道筆には、人もなきやうなる處なるべし。一說に人の住まぬ所はあるといふ、常のことなり。

一男弓やなぐひをおひて　愚に業平は中將の官なれば、弓やなぐひおふといふ、相違なし。其上雷鳴陣には弓箭を帶して內裏に祗候す、神さへいみじうなるとあれば、弓矢おへることは實事也。同事ながら道筆には、近衞司は弓箭を帶して雷鳴陣に候すれば、さもあるにやと云云。

一はや夜もあけなむと　人を盗みて行くには、夜をながかれとこそ思ふべきに、雷なり雨ふりて、物すさましき折なれば、夜も早くあけよかしと思

ふなるべし。

一鬼はや一口に　稱に、これもつくり物語也。惣而作物語とみるべし。愚に、女を人にうばはれたる事を、鬼にくらはれたるにたとふ。易に鬼一車とあれば、一口といひかへたり。

一あなやといひけれど　女のああといへる聲なり。愚に、あなはああといふ詞也。嗟嘆する聲也。うれしき事にも、切なる事にもあなといふなり。

一あしずりをして　哀にたへざる體也。愚に、蹉跎と書く也。

一白玉か何ぞと人のとひし時露とこたへて消えなましものを　草の上におきたる露を、かれが何ぞと問ひし時、返事も申さずして其儘來りし事を今思へばこれさへ後悔也。白玉やらむ何やらむと問はれし時、露とこたへて消えはてむ物をといへり。古歌になに歟と疑字はなし。今連歌などに人の多くすることなり。秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか波のよするか。如此などは尤よむべき也。ここも白玉か何ぞとよくうけてよめれば、此歌には難なし。此歌を新古今に哀傷部に入れたり。實に鬼もくはざるを哀傷にみるは、誠にくひてなき物になして入れたるなり。稱に、是は疑のかなりと云云。

一これは二條の后のいとこ　染殿の后の御もとに二條后ゐ給へり。愚に、此下の詞は物語の作者の、我と又釋したるなるべし。

一堀川のおとど　昭宣公也。二條后兄

一太郎國經　昭宣公の兄也。下蔕とは雲客の時也。愚、堀河のおとどは昭宣公基經を申す。太郎國經は長良卿の一男也。故に太郎といふ。昭宣公は忠仁公の子になり給ひて、官位は兄にまさり給ふ也。

七一京にありわびてあづまにいきける　業平の左遷の事沙汰ある事なれば其時歟。又ただも行きける歟。愚に、京にて人を戀侘びて、心をもなぐさむやとて、友だちをさそひてあづまへくだり、あまさへ奥州のかたへも行きけるなり。

一いとどしく過ぎゆく方の戀ひしきにうらやましくも歸る波かな　波の打寄せてはかへりかへりするを見て、我は都に住侘びて、田舍もとめするに、あの波はうらやましくかへるよとよめり。餘情あり。當位卽妙の歌なり。

一八友とする人ひとりふたり　世に住みわぶる人なれば、何かはおほかるべきや。

一信濃なる淺間の嶽に立つ煙をちこち人のみやはとがめぬ　あさまのたけの煙の面白きをはじめて見るに、さてもえこらへぬよと、我心に感じて、遠近人の見とがめざらむやといへり。

一九身をえうなき物に思ひなして　業平の我身は世の用に立つべき物にもあらずと思ひくたす也。

一道知れる人もなくて　業平のみならず、友とする人もみちを分明に知らざるなり。

一水ゆく川のくもでなれば　水の縱横にゆくを云。

一橋を八わたせる　八には限るべからず。水行く川が縱横なるに、あなたこなたへかけたるをいふなるべし。物の數をば、八を限にしていふものなればかくなむ。愚に、參河の八はしは、ふけのやうなる所に、絲くるわくのやうなる物をして、其上に板をしきて、あなたかなたへわたせるなり。今の世にはわくのやうなる物三ばかりあり。昔は八ありけむかし。蛛の手は八ある物なれば、くもでとはいへるにや。

一かれいひくひけり　愚に、かれ飯は旅の食物なり。干飯とかく。又餉の字をもかれいひとよめり。道　萬葉二、

家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる

と、有間王子よみたまへり。

一から衣きつつ馴れにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

きつつ、つまし、はるばる、皆衣の緣也。常の歌にとりては、秀句多くして嫌ふ

べし。これはかきつばたと折句におくほどに、かくまでは叶はざるにや。大方の旅なりともかなしかるべきに、況や故郷に思ふ人を殘しおきぬれば、一しほにかなしきとよめり。

一餉の上に涙おとして　感涙をもよほすなり。

一ゆきゆきてするがの國にいたりぬ　三河を過ぎて駿河に至る。

一つたかへではしげり　蔦雞冠木はしげりと、はをてにはによむべし。葉しげりとよむは辭劣れり。五月のすゑへんの體也。

一すずろ　稱は、心身してきたるなりと云云。或抄に不慮とかくなりといへり。又伊呂波類字鈔に情徒蕭。肖聞には、心ならざるなり。又辛字をもよめりと云云。或人抄に、すずろはからき心也といへり。又辛を漢書によませたりといへり。

一すぎやう者　愚に、或說に遍昭僧正といふ。又誰をいふなどあれども、いづれも證據なし。道、誰やらむと見るべし。

一いまする　私此物語三十九段に、いまそかりけりといへるに同じ。おはしまする也。ここもいかでかおはするといふ心なり。

一京にその人の　よき便宜なれば文をことづてたり。肖聞、誰ともなし。やむごとなき人のもとへなるべし。或抄に、つくはことづけと云云。

一するがなるうつの山邊のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり　夢にもあはぬといはむ爲に上句をばいへり。歌の心はうつつの事はいふに及ばず、夢にも思ふ人にあはぬといへり。なりけりといひつめたるが、面白くおぼえ侍り。肖聞、序歌也。又說、もと逢ひみし人なれど、立ちはなれきぬれば、夢うつつともに逢ひみたる人とも思はぬ心なり。

一富士の山をみれば　肖　時は五月也。奇異なる山の雪をみたる心なり。

一時しらぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪の降るらむ　山の名譽をいひたてたり。時しらぬ山は富士の峯にてありけり。こなたは五月のつごもり、既に六月になるに、いつと思ひてか富士の峯に雪は降るら

むといへり。鹿子まだらは、村村にふる雪なり。　愚　かのこは夏毛の星まだらなる物なり。

一ひえの山をはたちばかり　山の高さは都の比叡の山を十ばかりといへば、それにてはまだ事たらぬほどに二十ばかりといへり。私　ここにて富士を見ていへるにあらず、とどまりてかける詞也。

一しほじり　勘物に見たり。鹽やくにしたたる物ありてかたまれるが、山のなりに似たり。これを鹽尻といふ。寂蓮はこの説を信用すれども、定家卿は、此事更に和歌の潤色にならず、知らぬにておくべしとかけり。此義歌道の一の敎也。殊に絶妙なるにや。　肖　俊成卿説定家等不分明云云。

一しもつふさ　稱　下總也。

一おほきなる河あり　大なる河とかける尤面白し。此川をこしては、いよいよ故郷は遠くなるべしと思へる心なり。

一わたし守はや舟にのれ　はや日もくるるに早く船にのれといふ。　肖　舟にものりかねたる體也。心のすすまざるなり。

一皆人物わびしくて　友とする人も故郷のへだたることを思へるならむ。

一白き鳥の　肖　都鳥は背はくろく腹は白し。愚に、みやこ鳥は鷗といふ鳥也。

一しぎの大さなる　鳴のやうにて、それよりは大なる鳥といふ心なり。或抄に、鳴のほどらひなりといへり。あながち大小をよくよく寸法をとらずとも思寄りていふべし。

一名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　此鳥を問へば都鳥といへり。我故郷の名にて、一しほなつかしく思へり。名にしおふ事ならば都を問ふべし。我思ふ人はありやなしやと、都といふ名をかこちてよめるなり。

一舟こぞりて　肖　傍人も感涙をもよほす心也。　愚　舟の中の人みな

泣きけるなりといへり。又或抄には、遠近の傍人もなくといへり。

十一武藏國までまどひありきけり　或抄　業平行方もさだめず、あづま路にここかしこまどひ行きたるなり。

一女をよばひけり　或抄　武藏國にある人の娘にいひよるなり。肖國にある女誰ともなし。

一父はこと人に　父は此女をこと人にあはせむと思へるを、母は業平にあはせむと思へり。肖　父の心には業平にあはせむこと過分に思ひて、こと人にといへる也。

一父はなほ人　さしもなき人をなほ人といふ。俗姓なき人なり。稱　父は凡卑なる者にてあるほどに卑下の心なり。愚　なほ人は直人也。ただ人といふ心なり。

一母なむ藤原　源平藤橘、此四姓の中にも藤氏はたつとし。さるほどにあてなる人にあはせむと思へり。

一あてなる人　肖　勝人也。ほめたる義也。愚　あては當の字也。われ程の種姓なる人をあてなるといへり。母の種姓は父のしなにまされるをいふ。

一此むこがねによみておこせたり　愚　かねは器量也。此男人のむこになるべき器なれば、むこがねといへり。后に立つべき人をば后がねといふ。此物語にもまらうどがねといふ詞下にみえたり。肖にも又源氏物語に、后がねといへる類なり云云。稱　むこがねはなりひらなり。

一いるまのこほり　愚　むさしの國入間のこほりといふ郡の名なり。そこによし野の里あり。大和國のみよし野と同名なり。

一みよし野のたのむの雁もひたふるに君が方にぞよるとなくなる　愚　たのむは田面也。ひたふるは永の字をひたふるとよめり。一向にといふ心なり。雁の音はよるよるとなくやうにきこゆる故に、君が方によるとよめり。藤原氏の母、この男をむこにせむとてよみてやれる歌なり。道　君が

方へよるとなくぞとは、そなたへ心のひくといふ心なり。　肖　心は業平を聟にとらむと思ふ心ふかき故に、雁も君が方によると鳴くぞとよめり。我心をいはするなり。みよし野は雁おほき所なればなり。

一我方によると鳴くなるみ吉野のたのむの雁をいつかわすれむ　我方によると鳴くといへるは、其こそ本望なれ。其志をいつか忘れむとなり。

一人の國にても　他國にてもかく好色の事やまずといへり。　愚　唐土にはあらず、他國を人の國といへり。　稱　業平好色の事なり。作者のかきたる詞也。

一友だち　肖　誰ともなし。

一忘るなよ程は雲井になりぬとも空行く月のめぐりあふまで　拾遺には橘の忠幹が歌と見えたり。此には業平の歌とす。かやうに古歌又萬葉の歌などをかへてかく事多し。ほどは雲井とは遙にへだたるといふ義也。我立ちかへりて又逢はむまで忘るなといへり。　愚　此歌拾遺八にあり。作者相違せりと云云。　肖　此物語にては業平の歌と意得べし。月によそへてよめり。　或人の抄　稱名院新義に、直幹の歌ならば、人の娘に忍びて物いひ侍りける頃、遠き所にまかり侍るとて、此女のもとにいひつかはしける。橘直幹とありて、つぎに歌あるべきを、詞書に橘のただもとが、人のむすめにと云云。如此あり。業平の歌をここに似合たればかきておくりたるといへり。此義可然歟。

一人のむすめをぬすみて　殊に作物語の段なればなきことをかけるなり。

一國の守にからめられ　人をかどはかすとて國のかみにからめらる。

愚　國の守は武藏守也。ぬす人なればからめらるといへり。それまでの事はあるまじ。たはぶれにもおどしてすべきわざなり。

一みちくる人　稱　充滿してくる人といふ說、道來る人いづれにてもよろし。　道　滿ちくる人也。

一火つけむとす　肖　此物語の俳諧也。

一武藏野はけふはなやきそ若草のつまも籠れりわれもこもれり　此歌のあるよりして此段をばかき出だせり。つまとは此には女が男を妻といふ也。古今には春部に入れてかすが野とかへて眺望の歌とす。顯注密勘にこの歌の事委くしるす。五文字、春日野武藏野といへるにつきて、此事存證あり、祕藏すべし。人不考事也と云云。私　これは日本紀に文武天皇の御宇武藏國司の事なるか、家流不用說故不及勘見也。妻と男をいひたる證歌、萬葉に、

遠つ人松浦佐與姫妻こひにひれふりしよりおへる山の名

一女をばとりて　肖　國のかみの人人、女をぐしてゆく也。

十三 一きこゆればはづかし　肖　戀路のならひなり。

一むさしあぶみとかきて　肖　かけて思ふといふ心也。武藏あぶみといふこと、昔は其國より奉り初めたる物をば如此號する事あり。

一武藏鐙さすがにかけて頼むにはとはぬもつらし問ふもうるさし　さすがくる、みなあぶみの緣也。そなたをさすがに頼むには、問はぬも心にかかり、問ふも又心にかかるとなり。

一とへばいふとはねば恨む武藏鐙かかるをりにや人はしぬらむ　とへばうるさいといひ、問はねば恨をなす、身體きはまりたる處なり。かかる時にや人は死ぬるものにてあるらむとなり。

十四 一せちにおもへる　或抄に、切角に思ふ事也。又は親切に思ふなり。

一中中に戀にしなずば桑子にぞなるべかりける玉のをばかり　中中に戀に死なずしてあらむならば、せめて蠶になりともなりたきと也。かひこはかなけれども妹脊の契深きものなればば、又は命一年をすごさざる物なれば、戀に死なずば年をすごさずして、ことし內に何ともなりたきとなり。玉の緒ばかりは、ちとのほどなりともといふ義也。私　萬十二、

中中に人にあらずば桑子にもならましものを玉の緒ばかり

如此あるを、此物語にて改めたるなり。萬葉抄にいふ、玉の緒ばかりは桑子に縁ある詞也。肖　心は戀といふ物はあひみる事をたのまむに、さもあらねば、せめて死なむと思ふに、それもまたかなはぬ心なり。されば、中中戀に死なであらば、せめて桑子にもならばやとなり。

一歌さへぞひなびたりける　ゐなかうどしきなり。

一さすがにあはれとや　業平の人をすてぬ心なり。

一夜ふかくいでにければ　心とめむやうもなきが、夜ふかく出にけるなり。

一夜もあけばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

鶏が鳴かずばしばしもとどまるべきに、夜ふかくなきて人をかへす程に、夜も、あけば狐にくはせむといへり。くたかけは家鶏也。唯かけとばかりもよめり。萬葉十一、

里なかになくなる鶏のよびたててていたくはなかぬかくれ妻はも

愚　きつは狐也。はめは食の字也。きつねにくはする心なり。くたかけは庭鳥の名なり。鶏といふ字をかけとはよめり。それにくたといふ詞をそへたるは、ちひさきをくたといへば、ちひさき庭鳥也。まだきは速の字也。はやき心也。せなは夫也。　私　此物語正本の勘物に、東國之習家をくたといふ。肖　きつとは狐の下略也。くたかけは家の鶏といふ説あり。唯庭鳥と心うる至極也。　稱　はやく鶏鳴きてにくしとなり。女の如此思ふ心なり。

一くりはらのあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

をぐろ崎みつのこ島の人ならば都のつとにいざといはましを

といふ歌を上句をかへていへるなり。松の如くに主もなき人ならば、都のつとにさそはむ物をと也。　愚　くりはらのあねは奥州の所の名なり。古今の歌は、みつのこじまがおもしろき所にてあるほどに、そこの人ならば、都へさそひてのぼらむとよめり。此歌は松が人にてあらばさそはむとよめり。聊其心かはれり。つとは裏也。都のみやげにつつむ土産をつととといへ

ば、それによせていへるなるべし。　私　先此古今の歌の心を、後成恩寺は顯注密勘の説を用ひらるとみえたり。當流には小黑崎の三津の小島、面白き所なり。あはれ此島人倫ならば、ゐて都のつとにせむ物をとほめてよめる歌也。一説に大納言田邊福丸(四)歌也といへり。委く古今の抄にみえたり。

肖　松を其人にたとへて、さそはるべき人ならばいざといはましものをと也。又今案あり。勝地は主なしといへり。松の如くならばさそはむとなり。

一よろこぼひて　悅也。　肖　東國の詞さま也。思ひけらしとぞとは、男のおもひけるよと思ひて、女の悅びたるなり。　肖　業平の我を思ひけるとなり。

一十五なでうことなき人　愚　無何條事也。なに程の事もなきといふ事也。あしからずよからぬをいふ。此詞は源氏のあづまやの宿にもあり。　道　人をあなどつていふ辭也。させる人にもあらざるをいふ。　肖　なにばかりの人にもあらずといふ心なり。枕草子源氏物語にもさせる人にあらざるよしみゆ。　稱　可然人をいふ心なり。無子細といふこころなり。私云、愚見抄、道遙院筆、惟清抄、肖聞、此三説と稱名院聞書の鈔と其心異也。今源氏の抄を勘に、三光院抄の東屋の卷には、なでうことなきは、さしもなきといふ詞也。伊勢物語のは心かはれりと云云。稱名院筆の源氏の鈔には、いせ物語は無子細也。これは又心かはる由みえたり。私にいはく、かれこれを思ふに、いづれかまことならむ。又師説にいふ、なでうとあれども、なんでうとすこしはぬる、口の中によむなり。何ばかりの人にもあらず、さしもなき人といふ心なりと云云。

一あやしうさやうにて　此女をみるに、なびかむとも見えず。　愚　しじうかよはすべき女ともおぼえぬを、あやしく思ひて、其心を知らまほしく思ひて、歌をよみてやれるなり。　肖　人のめなればかく思へり。

一忍ぶ山しのびて通ふ道もがな人の心のおくもみるべく　うちみはざうさなきやうなれども、聊見どころあり。忍びて通ふ道といふは、人の心の

中へ忍びて通ふ道もがなといふ心也。しからば人の心のおくも見るべき物をとなり。愚　忍山は奥州にあり。さて人の心のおくとそへたり。此歌は新勅撰に入りたり。

一めでたしと思へど　あはれに思へるなり。

一さるさがなきえびす心を　愚　さがなきは不祥とも惡ともかきて、さがなしとよめり。わろき心なり。えびすはみちの國の人なれば、えびす心といへり。又えびすといふは西宮にましますひるこの神を、えびす三郎といへり。其神はいささかの物にても心かたぶきやすき神なれば、それをえびす心ともいふなり。忍山の歌をよみてやりたれば、女限なくめでたしと思へる心の見えければ、わろきえびす心と、男の思ひてしじうみむと思ふ心のなくなり侍るにや。道　えびすはたわむ方なくつよき所あり。さやうのふてたる心をもて、おしたる義ありてはいかがはせむと思へるなり。せむはのはの字はやすめ辭也。稱　此歌をあはれとは思へども、さりがたくいひてはいかがと思ひて、酌酌する心なり。私云、後成恩寺說如何、父子の說可也。さるはさあるえびす心といふ心なり。

一紀の有常　名虎が子なり。

一みよのみかど　淳和　仁明　文德　文德第一皇子惟高親王をまうけ奉るは名虎が女なり。此親王御位につき給はば、有常はさかえなむを、第二の皇子清和の御位につかせ給ひしかば、名虎がたの者は衰へたるなり。大鏡に藤原氏がさかふるほどに、紀氏はかれむとてかなしめり。

一よのつねの人のことも　尋常の人の如くにもあらず衰也。

一あてはかなる　風流なる事を好むなり。世上の義などにかけしろふ事なきをいふ。愚見抄には、あてはかはあてかひはかなき事とあり。あまりに訓釋したるやうなり。或人鈔に、あてはかは文字濁るは天福の本の聲也。すみてよむべき由みえたり。

一こと人にも似ず　常には貧して諂ひ富みて驕るものなるが、さもあらざるなり。

一よの常の事も知らず　世務などの事をも知らずしてなり。

一とこはなれて　夫婦の常をはなるるなり。夫婦は身の一期そふべきに、わかるるは常はなるるなり。肖　常字也。又は床也。愚　おのが妻もやうやう同じ床にいねず夜がるるを、床はなるるといへり。

一あねのさきだちてなりたる　姉のさきだちて尼になりたる處へゆく。肖　有常が妻のあねなり。

一男まことにむつましき事こそ　此程とてもむつましき事はなかりしなり。肖　有常が妻の性おもはしからず、かかる時節を堪忍せずしてはなるるを以て知りぬ。平生も有常が心に、まことにむつましと思はずもありぬべし。されども別るるはあはれなるべし。

一ともだち　業平也。愚　へだつる心なき友をいふ。有常かかる事を中將にうれへたる也。肖　思ひわびてと書ける詞心あるべし。思ひあまりて業平のかたへもいへるなり。又別して知音ならではいふべからず。

一手を折りてあひ見し事を數ふれば十といひつつ四はへにけり　四十年あひそひたるものかとこはなるる處の名殘をいかにと推量あれといふ心なり。愚　此歌は中將のかたへよみてつかはしたり。此女にそひて十四年送りしとよめり。又四十年といふ説もあるべし。手を折るは指ををりて數ふること也。肖　女の心なき事此歌にこもるなり。

一かの友だち　業平の有常が文をみて、あはれと思ひてしなじなのおくり物をやる。よるの物までといふまでの字にて、こと物をもやると見えたり。

一年だにも十とて四はへにけるを幾度君を頼みきぬらむ　女の上をたすけていへり。なれたる事さへ四十年にならば、今こそ何事もえせずとも、四十年の内には幾度か君を頼みて、其かげにてはありつらむ、別るる心さ

こそといへり。

一これやこの天の羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ　有常

悅びて又よみてやるなり。業平の夜の物までをおくれるは、此世の衣裳とはおぼえず、これや眞實天の羽衣なるらむといひて、げにも業平の衣裳なれば、天の羽衣と思ふもことわりなりといへり。　愚　よるの物までを彼の尼のもとへやりたる由をよめり。天の羽衣は中將の送れる衣裳也。中將は殿上人なれば天の羽衣といへり。さるから又尼の方へやれば、あまの羽衣よりきたれり。むべしは宜也。みけしは日本紀に衣裳とかきてよめり。だてまつるなどいふ辭は、かしづきたるやうに聞えたれど、歌はさのみある事也。女をば君といへば、たれにしたがひてたてまつるなどいはむ事、さらに難あるまじき也。　稱　あまの羽衣といひて、むべしはげにもさてあるよと、自問自答する心なり

一よろこびにたへで　一首にても心たらぬ程に又一首そへたり。

一秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける　秋は物がなしく、人のうれへをもよほす時也。しかれば秋の來て袖をしぼるか。露のおきて袖をぬらすかと思へば、今我悅にたへずして落つる涙にてありけりと也。　愚　よろこばしさもうれしさも、とりあつめて涙とふるとなり。

一十七年ごろおとづれざりける　此段に昔といふ字なし。書きおとせるか、又年比にて昔をもたせたるか、作者の心はかりがたし。　肖　唯かきおとすにや。　稱　年ごろにて昔の心をもたせたり。昔といふ字なき段二三あり。

一あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり　古今に

は春部に入て戀の歌にあらず。花をもあだなる物と名に立ちしが、かやうに年にまれなる人をも待ちうるものにてあるよといへり。もと業平の女にあひたりし時、此女をあだなる人といひし事あるか。それを今思ひ出して、我はあだにあらずといふ心をよめるなり。或祕抄の一說に、此歌は在中

將二條后ををかして、三年東山におし籠められてこざりけるが、ゆるされてやよひの花盛に行きたりける時、有常娘のよめる歌なりと云云。

一今日こずばあすは雪とぞ降りなましし消えずはありとも花とみましや

今日我が來たればこそ花ともみれ、明日きたらば木のもとの雪とはみるとも、花とは見るべからず。今日女のうつろはぬ時きたればこそ其人とは見れ、あすうつろひて後來たらば、其人とはみるべからずとなり。

十八

一なま心ある女　愚　心あるにてもなく、又心なきにもあらぬをなま心あるといふ。なまなましき由也。肖　物ずきの女也。小町といふ義あれども、惣じて段段の女を、これはたれ彼はそれといはむ事、たとひたしかに知るともおぼつかなし。ことに時代をへたる事を、いかむとして慥に知るべきや。習ふ處、集讀人知らずと同じといへり。よみ手あれども其集にては、其儘讀人しらずにておくなり。

一男ちかうありけり　業平其女の隣にあるなり。

一心みむとて　業平の心をひいて見むと思ふなり。

一紅に匂ふはいづら白雪の枝もとををに降るかともみゆ　いささかうつろふ所は紅にみゆれども、大方は枝に雪のふりかかるかと見ゆるとなり。白は色の本にて、うつろふ事なき正色なり。白雪を業平の心の色みえぬにたとへたり。さらに業平の心はこなたへうつらぬともいふ心也。肖　好色の人と見れどさもなきといふなり。愚　紅に匂ふとはうつろへる菊の色をいふ。いづらはいづれ也。又いづくといふ辭をいづらといふ所もある也。たわわはたわむなり。とををともいふ。五音通ずる也。古今歌

折りてみば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわにおける白露

とををとかける本もある也。此歌の心は、紅にうつろへる花と、白雪のやうにたわわに咲ける枝とは、いづれぞとよめる也。

一しらずよみに　此歌は我心を擧辨して讀むと知れども、知らぬよしにてよめり。ちとも動せず返事せむため也。愚　女の我をこころみるとは

しらず、口にまかせて返ししたる也。

一紅に匂ふが上の白菊は折りける人の袖かともみゆ　くれなゐに匂ふ白菊は、をりける人の袖もかくぞあるらむと思ひやると、いささかも動せぬやうに讀みてやるなり。

一十九宮仕しける女　染殿后の御事也。業平は忠仁公へ家禮也。染殿后は當代母后にておはしませり。

一ごたち　染殿后の召仕はるる女なり。愚　後達とかく、女房の惣名也。此ごたちは紀有常が女なり。古今十五にみえたり。

一程もなくかれにけり　愚　男のかたよりかれがれになれる也。

一同じ所なれば　愚　つねに同じ處にて參會するなり。

一あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目にはみゆるものから天雲のよそとつづくるは、空に高き物なれば、よそといはむためなり。女の目には業平をいつもみれども、業平は女をどこにある物とも思はぬをいなり。稱　なりゆくかは哉也。なもじを下略するなり。

一天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり　我よそにありて近づかぬは、そなたに風のはげしき故也。風が早きほどに、雲のおりゐむやうのなきといふ也。そなたには主があるほどにわが近づかむやうなきと云心也。或祕抄に、わが入る山とは內裏のことなり。そなたの心はげしきによりもつかぬ由なり。又男ある人となむいひけるは內裡へ忍びてまゐりけるなり。一說には光孝天皇へ忍びて逢奉るといへり。

一二十やまとにある女　ならの京にある女にや。稱　奈良の京にてもあるべし。

一宮仕する　業平の事也。奈良の京より今の京へかへるなり。

一紅葉のいとおもしろきを　肖　紅葉の色よきなり。

一君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋の紅葉しにけれ　君がためにと思ひて折れる枝は春ながらかくもみぢするは、君が心のうつろふ

ゆゑにやといふ心也。　肖　女を疑ひていひなせる也。

一返事は京にきつきて　返事を今やくるくると道すがら待ちきたる心あり。

一いつの間にうつろふ色のつきぬらむ君が里には春なかるらし　上のかくこそ秋の紅葉しにけれといふを其儘うけて、いつの間にそなたにはうつろふ色のつきけるぞ。さてはそなたには春もなくなりけるかと、なむ。

肖　女の立歸りて男の心を疑ふなり。かからば君が里ははや秋になりはてけるよとなり。

一廿一かしこく思ひかはして　よく思ひあへるなり。　稱　ふかく契りたる事のかはりたる也。

一いかなる事かありけむ　肖　かはるべき事を不審する也。

一いささかなる事　女の堪忍もなき性にてあるか。　愚　すこしの事をいひて、此女家出をしたるなり。

一出でていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人は知らねば

ここを出でていなば、我を心かろいものと人のいひやなさむ、得堪忍せぬいはれのあるを、人の知らざればといへり。　愚　女の歌也。世中をうしと思ひとりて、いぬるをば知らで、我をかろがろしく人のいひなさむとよめる也。　肖　夫婦の間の恨ある事を知らで、世中の人は此家をうかれ行くを、心かろしとはいはむといふ心なり。いささかなる事とあれば、女の誠心ならぬさま也。　稱　心かるしのかもじ濁るべし。

一けしう　愚　恠の字也。あやしくといふ心なり。道もあやしくなり。　稱　ことにといふ心なり。

一門に出でてとみかうみ　二人の聞書に、と見かう見と、見の字にてよしと見えたり。

一思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我やすまひし　かやうに出でていなむとは思のほかの事也。まことに思ふかひなき世なりと

いへり。但身にはおぼえねども、又あやまりやあるらむ。隨分年月を契ると思へども、もし不足なる事もありぞしつらむ。我やあだにも契りしといへり。　稱　此歌眞實毎篇にわたるべき歌也。女をばうらみず、我を觀じたる心也。　肖　上二句は此女を深く思へども、立出でぬれば、思ふかひなき世なりけり。人の心はかくある物なりといふ心なり。さて年月といふより我心をいへり。もしまた我もあだに契りてやありけむと、一方に人にとがをおほせずよめり。これ中將の心なり。

一人はいさ思ひやすらむ玉鬘面影にのみいとどみえつつ　思ひやすらむは、思ひやするらむ、思ひやせざるらむといふ心なり。いでていにける女の、我を思ひやするらむ、思はずやあるらむ、面影にのみいとどみえぬるとなり。玉鬘は女のかくる物なれば、萬葉に玉かづら面影とつづけてよめり。またやみむ片野のみのの櫻狩花の雪ちる春のあけぼのとよめるも、またやみむ、またやみざらむといふ心なり。私云、萬葉を勘に、玉鬘面影とつづく歌みえず。萬葉二、

人者縱念息登母玉鬘影爾所見乍不所忘鴨

もし此歌をあらためて、此物語の歌とせるにや。偏に管窺の新說也。此萬葉の歌の玉かづらは、冠の纓をいふなりと云云。又人者縱もこの物語の歌とは心ことなるか。萬葉のはたとひといふ心とみえたり。

一ねんじわびて　男のかへれといひやするらむと思へども、さもなきほどにこらへかねて讀みてやる。

一今はとて忘るる草の種をだに人の心にまかせずもがな　我出でてきたるに、今はさらばさもあれとてうちおくは、忘草を生じて、我をありとだにも思はぬ物也。あはれ忘れ草を人の心に生せずもがなといへり。　肖　中將の心にはや限と思ひなして忘れやすらむ、さもあらずもがなといふ心也。　愚　草の種なれば蒔くといふにそへたるなり。

一忘草うゝとだに聞く物ならば思ひけりとは知りもしなまし　上の歌

をはたらかさずしてよめり。思ひある上にこそ忘草をばうゑ、忘草をうるほどならば、我思ふといふ事をば知るべしといへり。又そなたにも忘草をうるならば、こなたを忘れぬと知るべしとなり。

一ありしよりけに　本よりも猶相語らひけり。稱　ありしよりけに、げ文字すむ。ありしよりもつよくといふ心なり。

一わするらむと思ふ心の疑にありしよりけに物ぞかなしき　今又かたらへども、又や我をすてていなむと、人の心の疑はしさに、ありしよりなほすぐれて物かなしきとなり。げにとはすぐれてといふ心なり。肖　かねてあさはかに立出でし人なれば、なほうたがはしきとなり。愚　けには勝字也。

一中空に立ちゐる雲の跡もなく身のはかなくもなりにけるかな　女の我心を觀じてよめるなり。わが心かろき事をして、さしもなき事にいにしか、さらば其儘にもなくこらへかねて立歸りたるは、雲の根もなく半天にただよふが如くなりといへり。肖　更に定なき我身の有樣を、中空の雲の定なきによそへていへるなり。

一おのが世世になりにければ　離別して前前の世になるをいふ。肖　此詞は歌よりつづけてみるべし。

一うとくなりにけり　いもせの契もなきをいふ。

一廿二はかなくて　肖　はかなく何とやらむしてたえたるなるべし。

一憂ながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞこひしき　一度は別れて後に、うき物には思ひはてたれども、なほえ忘れざれば、かく恨みつつなほ戀ひしといへり。かつはかつがつにあらず、かくといふ心也。稱　かう也。かく也。古歌にかくをかつといへり。

一されればよといひて　業平のこなたもさやうにありといふ心也。肖　同心したる也。次の歌は返しにはあらで、又心をおこしてよめる也。

一あひみては心ひとつを川嶋の水のながれて絶えじとぞ思ふ　心ひと

つを川嶋といふは、又よそへもやらず心をかはす義也。水は流のたえぬものなれば、その如くにたえまじきと也。川嶋は川の中にある島なり。川島はゆきめぐりてあるものなり。別れてまた逢ふといふ義あれども、次なる說なり。

一とはいひけれど其夜いにけり　歌には行末をかけて契れども、え念せずしてやがて其夜いきけり。いにけりはいきけり也。狩にいにけりもいきけり也。　肖　思ひかねたる心にや。　愚　男のかやうによみたれども、女は其夜ほかへいにたる也。　稱　後成恩寺はいにたる分にみず、如何如何。

一いにしへ行くさきの事ども　後成恩寺これより一段にきり給へり。定家卿自筆の本にも、ここをあけてかけり。されどもここはよみつづけて見るべきにや。このかはりに依りて愚見抄よりも一段すくなく見るなり。

一秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寐ばやあく時のあらむ

秋の夜の千夜を一夜にして、それを八千夜ねたりともあくべからずと也。深切にいはむため也。私にいはく、なずらへてといふ詞の注、諸抄に見えず。今案、秋の夜の千夜を一夜にたとふるほど、ながき一夜を八千夜ねばやとなり。擬字也。

一秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鳥やなきなむ　心分明也。

一廿三 ゐなかわたらひ　常には田舍にゐずして、時時田舍へ下るをいふ。　稱住するにはあらず、かよひ住む也。やまとなどの田舍に常住はすまぬなり。

一人の子ども　或抄　業平も幼少の時紀有常が女も若年なりし頃也。

一男も女もはぢかはして　或抄　互にはぢてかたらひ侍らずとなり。

一おやのあはすれども　私　有常が女にこと男あはすれど、業平ならでは、と思ふ心なり。貞女の德をかきあらはせり。

一となりの男　或抄　業平也。有常が家居ちかし。

一つつゐづつ井筒にかけしまろがたけすぎにけらしな妹みざるまに

稱　重詞也。みよし野のよし野といふ類也。或人抄に、定家

つつゐつの井筒の垂氷とけぬ間に早くも暮るる冬の空かな

とよめり。又或人抄に、つつゐつのつ文字はやすめ詞也。愚　詞に井のもとにて遊ぶとあれば、男のたけがおとなになりて、井げたの高さに過ぎたりとよめり。まろは昔は我身を稱して丸といへり。童などの名乘に何丸などいふにや。妹はただ女をいふ也。道　つつ井の井づつといはむためなり。肖　まろがたけ。たがひに身のたけのいかほどになりたらむ時、契をかはすべしなどいへるなるべし。

一くらべこし振分髪もかた過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき　或人抄振分髪は幼き者の髪也。おとなになれば髪をあぐるなり。道　女は其年來れば笄する也。又或抄にもろこしに女は十三にて簪すとあり。肖　心はただ君が手をふれむといふ也。ちぎるをいへり。　私　今の世にも女の五衣きる時に髪あげするといへり。

一ほいの如く　或抄　男も女も本意の如く夫婦の契結ぶ也。

一年比ふるほどに　或抄　偕老同穴の契、年月ふるほどに女の親のむなしくなるか、または親のなきが如くなるか也。肖　當流には、まことになくなりたるなり。又古注說に、親時をうしなひて、なきが如くにてもあるべしとなり。

一もろともにいふかひなくて　互にいふかひなき體にてあらむより、諸共によき方にゆかむと也。大和物語に、あしからじよかれとてこそ別れけれとよめる心なり。　私　此歌大和物語勘に

あしからじとてこそ人の別れけめ何かなにはの浦もすみうき

とあり。歌の詞、道遙院筆相違不審、又拾遺和歌集

あしからじよからむとてぞ別れけむ何か難波の浦は住みうき

と見えたり。いづれか實ならむ。肖　此段の心も業平の心あさきにはあらず、女を憐愍の心なるべし。

一あしと思へるけしきもなくて　　嫉妬する氣色もみえざるなり。

一思ひうたがひて　　肖　業平を出しやりなどするも、またさすがに疑はしく思ふなるべし。

一せんざいの中　　或抄に、後園前栽とて種種の花木などうゑ木したる中也。

一いとようけさうして　　古今に琴をかきならしてとあり。　肖　身をつくろひやさしき樣也。

一風ふけば沖つ白波立田山夜半にや君がひとりこゆらむ　　白波は盜人のこと也。たつた山に盜人のあるをいふといへり。顯注密勘に注するに、立田山といはむとて沖津白波とつづけ、浪たつといはむとて、おきつ白浪とつづけ、風吹けばとおけるなり云云。盜人を白波といふは莊子より起れり。綠林白波といへり。此歌をば盜人の事とみずして枕詞とみたるが面白きなり。定家卿もさやうみるを感じたり。歌の心は風波はげしき時に、立田山をこえて、艱難をへて、君がひとり行く事よといふ心なり。　肖　是序歌也。心は女まづしくなりて、業平とあひそふ事をも恥歎きて、二道の恨をも思はず、出だしたてて國を隔てて過ぎゆく山のおぼつかなきに、かかる夜しもひとりやこゆらむといへる心を、よく思ひいれて吟味すべし。貫之も此歌を歌の本といへり。　稱　此歌ぬす人の事古來の說也。盜人を白波といふ事左傳より出る也。これは盜人の事とはみるべからず。顯注密勘、顯昭が說よきなり。此歌の事は大和物語にものせて萬にかきたり。やさしき事ども也。顯昭顯注密勘に曰く、今案に、ぬす人を白波といふ事は侍れど、必しも盜人とは思はでもやよみ侍りけむ。波は立つものなれば沖津白波立田山とよみ侍りぬべし。萬葉集第一に、

海底の奥津白波立田山いつかこえなむ妹があたりみむ

此歌は和銅五年四月長田王伊勢齋宮につかはす時、山邊の御井に作歌云云。然者今歌は、立田山をひとりこゆれば、ぬす人の恐もあるべし。長田王下

向伊勢之時、山邊御井にて詠歌に、あながちに盗人立田山とよむべからず。此歌ともに波たつた山とよめるとみえたり。錦たつた山、雲たつた山ともよみたり。諸歌仙、古今皆稱梁上公由、愚案獨存此義還有怖歟。定家卿云、昔も今も白波稱盗人、庭訓又如此。但愚案遺不審、ただやまとにはあらぬ唐衣の體につづけたらば歌の本意也。此今案殊可貴、有興と云云。或祕抄に、夜半古くはよはとよむ。今はよわと用ふるなり。女のおとろへぬるに、かれゆく人は悲しけれども力なし。されどもなほ男を思ふ心尤哀也。又或祕抄に、盗人を白波といふ事、文選云梁武帝御宇白波綠林在二人入海登山盗天財入地盧といへり。此は梁武帝の時二人の盗人あり。一人は山にゐて綠林となりて、人のとほる時まきこめて物奪取り、白波と云は海にゐて白波と現れて船をくつがへして物をとれり。皆以術する也。終に廣契といふ將軍にころされぬ。地盧といふは方一里に土穴を掘りてその中にすみけり。後にはうめり。此心を以て盗人を白波とも綠林ともいふ也。同鈔に、たかやすの女は

河内國高安郡に丹波介佐伯忠雄といふ人の娘のもとへかよふなりと云云。又或一本の祕抄同之。又或祕抄に、梁武帝の世に暴龜といふ二人の盗人あり云云。事始記曰、卷白波酒令名起於東溪。禽白波賊如席卷。酒席言之以快人意。又三體絶句に蜀江雪浪西江滿の抄云小補云、蜀有白浪谷、乃盗賊之所居也。雪浪亦謂之。大和物語云、むかし大和の國かつらぎの郡に住む男女ありけり。此女かほかたちいときよらなり。年比思ひかはして住むに、この女いとわろくなりにければ、思ひわづらひてかぎりなく思ひながら、めをまうけてけり。此今のめはとみたる女になむありける。ことに思はねど、いけばいみじういたはり、身のさうぞくもいと清らにせさせけり。かくにぎはしき處にならひてきたれば、この女いとわろげにてゐて、かくほかにありけどさらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にも限なくねたく心うく思ふを忍ぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほいねといひければ、わがかくありきするをねたまで、ことわ

ざするにやあらむ。さるわざせずば恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。さて出でていくと見えて、前栽の中にかくれて、男やくるとみれば、ばしに出でゐて、月のいといみじうおもしろきに、かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまでねず。いといたううち歎きてながめければ、人まつなめりと見るに、つかふ人のまへなりけるにいひける。風吹けば云云とよみければ、我上を思ふなりけりと思ふに、いとかなしうなりぬ。此今のめの家は立田山こえていく道になむありける。かくてなほみをりければ、この女うちなきてふして、かなまりに水をいれて胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとてなほみる。さればこの水あつゆにたぎりぬれば、ゆすてつ。又水をいる。みるにいと悲しくてはしり出でて、いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞといひて、かき抱きてなむねにける。かくて外へも更にいかでつとゐにけり。かくて月日多くへて思ひやるやう、つれなきかほなれど、女の思ふことといみじき事なりけるを、かくいかぬをいかに思ふらむと思出でて、ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりければ、つつましくてたてりけり。さてかいまめば、我にはよくて見えしかど、いとあやしきさまなるきぬをきて、おほくしをつくしにさしかけてをり、手づからいひもりをりける。いといみじと思ひて、きにけるままに、いかずなりにけり。此男はおほきみなりけると云云。

一始こそ心にくくもつくりけれ　心にくきさまにつくりし也。或抄に、つくりけれはひきつくろふ也。

一手づからいひかひとりて　手づから取る事はあるべからず。ほどらひをはからふをいふなどいへども、それは猶優ならず、誰其儘にみるべし。物語の俳諧のやうなれども、さぞありつらむ。愚　飯かひはいひもる匕なり。さまでの事はあるまじけれど、ただいやしきわざをするといへるにや。但昔は事をかざらず、すなほなる道をさきとすれば、さる事もやしたりけむ。

一けこのうつは物　愚　家子也、家の中にめしつかふ物のうつは物に手づからもりけるなり。或抄にいはく、けこはしもべ家禮などにや。

一こころうかりて　或抄に、業平心うき體におもひしめたるなり。

一君があたり見つつをらむ膽駒山雲なかくしそ雨はふるとも　肖

これ萬葉の歌也。我心にかなへば、古歌を詠じいふこと常の事也。あはれ深きさまにや。道　いこま山は高き山なり。能因の歌にも、

わたのべの大江の岸に宿りして雲井にみゆる伊駒山かな

一からうじて　或抄に、辛勞してといふ心なり。又やうやうとしてといふ心なり。

一やまと人　或抄　業平也。やまとにゐたるがゆゑになり。

一君こむといひし夜ごとに過ぎぬればたのまぬ物のこひつつぞふる

肖　古歌也。心は明也。不及注と云云。愚　萬葉の歌也といへゝ。私云、萬葉勘に不見不審也。或抄　つつといへるよりふるとあれば、すてられて此方ほどへたる心あるなり。愚案の一説にいはく、たのまぬ物の戀ひつつぞふるとは、憑まぬものの如くに、戀ひつつぞふるといふ心なり。定家歌の、やくや藻鹽の身もこがれつつといふてにをはと同意也。

一男すまずなりにけり　愚、つひに離別せる事をすまずなるといへり。或抄に業平かよはぬ儀也。私云、紀有常が女は貞女なるゆゑ、業平と契りたえず、河内の女へは絶えはてて通はぬ也。いよいよ有常が女の貞女のところ顯はるるをいふ義也。惟清抄肖聞等此注の心すこし混亂せり。さるによりて加今案也。

一廿四かたゐなかに住みけり　業平の事也。

一宮仕しにとて　京へのぼる也。肖　朝につかふる也。

一三年こざりければ　令に夫が外蕃にあたりて來らざるに、子あれば五年、子なければ三年にして、嫁を改むることをゆるせり。さやうの心にや。

一いとねんごろにいひける人　肖　こと人に契るなり。

一此男きたりけり　業平の來るなり。

一この戸あけ給へと　門などたたく歟。

一あら玉の年の三年を待侘びて唯こよひこそにひまくらすれ　稱他人に嫁する心也。はや嫁したる所へ本の男來る也。門をもあけずして歌をよみて出す也。　肖　かくす所もなくいへり。　愚　ただ今宵こそにひまくらすれとは、こと人にはじめてあはむとするといふ心なり。　肖　此歌男の絶えたりとも三年は待つべき事定まれるゆゑにや。三年も過ぎぬれば新枕するといふ心なり。但まことに新枕せむにはかやうにもいひがたし。唯中將を恨みていへるにや。前の詞はわざわざかやうにかけること、此物語におほし。或抄に、

誠にや三年もまたであら玉の伏見の里に新まくらする

又或人の抄に定家卿の歌に、

忘るなよ三年の後の新まくらさだむばかりの月日なりとも

一梓弓まゆみつき弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ　弓を三つづけたるは、三年の心などいふはしからず、唯かさね詞なり。

弓といへばしなき物を梓弓まゆみつきゆみしなこそあるらし

と神樂の歌によめり。ひといはむとて、弓を三ついへり。君に心ひきて年をへぬる程に、我せしちかひをうるはしくせよとよめり。　肖　うるはしきとはまことなり。　愚　かごととあまたの心あり。いささかなる事をかごととといふ。源氏に露のかごととといへる類也。又かこつけのことをかごととともいふ。此歌のかごとは誓ふ事と聞えたり。歌の心はかごとをうるはしく思はで、又こと人に見えむとするとよめり。かごとは必ずしも神佛をかけて誓ふ事に限らず、夫婦の中の長くかはらじと、互に契ることをもみなかごととといふべき也。

一梓弓ひけどひかねど昔より心は君によりにしものを　そなたの心は、

我に引くやらむ、ひかざるやらむ知らず。我は昔より心君によるといへり

肖　弓ばひく時は本末の我方へよるものなれば、詞の縁によるとよめる

なり。

一しりにたちて　肖　したふ心の切なる也。

一をよびの血して　　をよびはこ指也。

一あひ思はでかれぬる人をとどめかね我身は今ぞ消えはてぬめる　こ

こにて死ぬにはあらず。肖　思のかぎりなるをいふ。

一いたづらになりにけり　　稱　あながち死ぬにはあらず、絶入などなり。

愚　其時やがてむなしくはなるまじけれども、此思より病となりて、つひ

にうせたりといはむとて、はなはだしくはかきたるなるべし。

一廿五あはじとも　稱　これは業平にあふまじきといひはなさで、ちとう

らみたる女也。愚　あはじとはいはねども、又さすがあふことははばか

るとなり。道　さすがきれはなれたるやうにはみえざる也。

一秋の野に篠分し朝の袖よりもあはでぬる夜ぞひぢまさりける　秋の

野も篠も朝も、露多きものなれども、尋ねいきてあはでかへる夜の袖はな

ほぬれまさるとなり。或祕抄にあさの袖は朝也。大和物語に云、文武天皇の

御時、中將櫻田利名といふ人、大和にすみける女を思ひて行けども、朝の袖

ぬれてあはでかへりかへりしけるを、朝の袖ぬるるといへり。

一いろこのみなる女返し　　或人の抄にこ文字すみたり。

一みるめなき我身をうらと知らねばやかれなで蜑の足たゆくくる　我

身とは男の身をさしていふ。我がみえぬはそなたへ恨あるゆゑなり。そな

たの身をうらめしいと知ちざるにや、かれず足たゆきばかり、などくるぞ

となり。古今には小町が歌と見えたり。或祕抄に、これは小町が光孝天皇に

寵愛せられし時、業平にあはざるを愁ふるときによめり。又或祕抄に一義

には、小町己が身を卑下して、河邊には海草のあるを尋ねてこそ、あま浦づ

たひにも行き通ふに、我身の浦にはみるめもなきに、何の用に足たゆく來

るとなり。かれなでとは不離と書くなり。足たゆく來るとは足弱來と書く也と云云。　稱　此我身は向の業平をさしていふなり。

一廿六 五條わたりなりける女　二條后也。

一わびたりける人　染殿后也。業平のあらぬ思することを、不便に思ひたまへる其返事に、業平のよめるなり。　愚　女の歌はみえず、もし文の返事に此歌をよめるにや。

一思ほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし船のよりしばかりに　戀路は及ばぬ思なれども、染殿后のいましめ給ふべきを、我心をおしはかりてあはれみ給ふを、ありがたきと悅の涙をながすなり。よりしのし文字はやすめ詞也。過去のしにはあらず。　稱　此し當時なき體也。

一廿七 ぬきす　たらひの上に、竹をみすのやうに編みて、へりをさして、それを打渡して手水つかふもの也。　稱　竹をそめて、うつくしくあみたる物也。水のとばしりをかけじため也。　愚　外へちらさじのためなり。貫簀也。

一たらひのかげに　稱　わがかげをみていふ也。　肖　手洗ふ女の影也。

一我ばかり物思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり　盥の水に影のうつりたるを、水の下にも又もありけりといへり。　愚　三十五字の歌也。

一みなくちに我やみゆらむ蛙さへ水の下にてもろごゑになく　水口に蛙が一なければ惣の蛙がなくなり。鳴きやめば又惣が鳴きやむなり。水口の蛙がなければ、惣の蛙が鳴くやうに、我思がそなたにあるによつて、そなたの思があるなり。我思がそなたの思の初になるなり。　愚　水口は田へ水をせき入る口也。

一廿八 色このみなりける女　或抄　好色にあだあだしきなり。

一などてかくあふごかたみになりにけむ水もらさじと結びしものをあふごは逢期也。これをかごによせてよめり。何とて逢事のかたくはなりつらむ、さしも水もらさじとこそ契りしか、かごにいれたる水のあとなき

如くなれるよとなり。或抄二部にあふご此分に濁る也。師説もまた濁る也。

一廿九春宮の女御　春宮の母儀の女御也。二條后の御事也。

一花の賀　肖　花の時あるを花の賀といふ。紅葉の賀といふは秋なれば也。此賀事古注には二條后廿賀と云云。稱　古注に廿賀とかける、四十から賀はする也。此賀誰とも知らず。二條后の事を心にもちてよめる也。愚見説、さもあるべき歟。愚　女御は二條后也。陽成天皇は貞觀十一年二月一日太子に立給ふ。御年二歳也。これより御母二條女御を東宮の女御と申侍る也。頭書　花の賀の事は染殿の后四十賀をいふ。此女御二條后のし給ふ也。奉行兩輩承る。されば二條后に立交て行ふ事を下心うれしく思ひて、日も暮過ぐれば悲しと思ひて花にあかぬと心をこめていへり。當流也。

一めしあづけられたり　業平の奉行することなり。肖　業平は忠仁公染殿などへ家禮なる故なり、

一花にあかぬ歎はいつもせしかども今日のこよひに似る時はなし　上には御賀の體をよめり。底には、花にあかぬとは二條后の御事也。かかる折にもまぎれぬ思のある處をいへり。此花の賀はたが御賀といふ事知らるるなり。肖　けふのこよひといふをつよくはあたりていはで、大やうにうちながめていふべし。

一三十はつかなりける　肖　ほのかに逢ひたる女なるべし。

一逢事は玉の緒ばかり思ほえてつらき心のながくみゆらむ　玉のをばかりはいささかばかりなり。あふ事は露ばかりにて、つらき心はながしといへり。

あふ事は玉の緒ばかり名の立つは芳野の川の瀧津瀬のごと

或抄に逢ふことは珠數一くちのほどと云云。

一三十一宮の内　禁中也。

一あるごたち　或抄に後達也。稱　ごたちは女房達也。

一わたりけるに　或抄に業平也。御つぼねたちの前わたりを過ぐる義也。

一何のあたにか　愚　あたはかたき也。何程のとがに、あたのやうに思ふらむとなり。

一よしや草葉に　業平の盛なりとも秋風の吹きてしをるる時あらむ物をといふ心なり。或抄に續萬葉第八に、

　忘れゆくつらさはいかに命あらばよしや草葉のならむさがみむ

石上乙丸歌也。此下句也。それをとりていへり。愚　さがは不祥也。のろふことばなり。

一罪もなき人をうけへば忘草おのが上にぞおふといふなる　うけへとはのろふ心也。とがもなき人をのろはば、還著於本人のことわりにて、忘草はそなたの上におふべしとなり。愚　うけへは日本紀に誓の字をうけへとよめり。ここには呪詛をうけへといへり。或抄に、忘草といふは、此女を業平の忘れけるを恨みて、よしや草葉のなどいひけるにや。

一といふをねたむ女　稱　かやうによみかはしたるを、又そねむ人あるなり。そばからまたねたむなり。常のならひなり。

三十二年ごろありて　肖　絶えてなり。或抄に業平を忘れたるなり。女を恨みてなり。

一いにしへのしづの小田卷くりかへし昔を今になすよしもがな　古と昔とは同事也。今などかやうによまむはよろしからず。ここは古のしづの小田卷といひて、昔を今といふ程に句をへだてて心かはるなり。肖　中絶したる人をたちかへり慕ふ心なり。愚　しづのをだまきといふは、げす女の苧をうみて卷きたるを、へそといふを、しづのをだまきともいふ。さていやしきとつづけてよめり。此苧をばながくうみてくりおける物なれば、くりかへしともいへり。又いやしき事ばかりによめるもあり。私云、校合の正本の頭書に、舊今無作者と云云。此歌古今になし。

一何とも思はずやありけむ　肖　伊勢が詞なり。此人人の行末しらねば、かくかけるにや。道　女は何とも思はずやありけむ。

三十三
一つの國むばらのこほり　稱　業平は津國に知行ありて行通ふなり。
一此たびいきてはまたはこじと　業平の京へのぼらば、又はとはれまじき氣色と思へるを、女をなぐさめて業平のよめるなり。
一蘆邊よりみちくる潮のいやましに君に心を思ひますかな
　蘆邊よりみちくる潮のいやましに思ふか君が忘れかねつも
と萬葉にあり。此は下句ばかりをかへたり。蘆邊の潮はうはべは見えねども深き物也。上にはうすく君を思ふやうに見えてぞあるらめど、底にふかく君を思ふ心ありとなり。愚　いやましはいよいよますなり。稱　蘆の中よりさす潮は、さすやうにもみえぬ物なり。其樣に我は女を思ふとなり。
一こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき　籠江はふるき江也。落葉もつもり、草もしげりてみえぬ江なり。眞實の下の心をば何として知るべきぞ。さりとては淺くみえたるを、あはれさして深き心をみばやとなり。
一よしやあしや　子細なくよみたり。稱　ほめたる心也。愚　むばらの郡の女なれば、井中人と云。それが歌にてはよしとやいはむ、あしとやいはむとなり。
三十四
一いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに歎くころかな　詞書を心におきて此歌は見るべし。いはむとすればえもいはれず、又いはねば胸にみちて、思が胸にさわぐ樣なり。さるほどにこころ一つに歎くといへり。
一おもなくて　此常なき人に、何と讀みてやるとも、なびくべきにあらずと思へども、しひてよみてやるなり。肖　はづる心なり。稱　おもてつれなきなり。つれなき人はいうたるにもかなふまじけれどもなり。愚　面目なけれどもといふ心なり。つれなき人をしひてしたへば、おもなきといへるなり。

三十五 一心にもあらで　或抄に、心の如くにもあらで絶えたるなり。

一玉の緒をあは緒によりてむすべれば絶えての後もあはむとぞ思ふ

玉の緒とは命をいへども、ここはただ緒といはむためなり。あはをとはあはせたる緒なり。片絲はむすぼるるが、堅く合せてよりたるは、引きはなせどもやがてもとの如くよれあひて絶えはつる事なし。其如くにたえての後もまたあはむとよめり。

三十六 一忘れぬるなめりと　肖　問ふことは、問ひながらうらむる心なり。

稱　忘れたるかと問ひたる人になり。

一谷せばみ峯まではへる玉かづらたえむと人にわが思はなくに

萬十四 谷せばみ嶺にはひたる玉葛たえむの心を我思はなくに

といふ歌をすこしかへていへり。谷ひろくば、よそへはひまはりても行くべきが、せばきほどに峯まで生ふる也。たえまじきといふ心をよめるなり。

肖　上は序也。是も作物語の段也。

私云、玉かづらとは、花咲きて實ならぬかづらなり。

萬二 玉かづら實ならぬ木木は千早振神ぞつくといふならぬ木ごとに

此注に或抄云、此歌を釋するには、玉かづらといふは、かづらの中に花のみ咲きて實ならぬかづらのあるをいふなり。多くは神の社などにぞ讀みたるといへり。是によりて心うるに、神のおはします森林などの木をば、人の恐れてきらぬ物なれば、年へたるおほ木どもの侍るに、花は咲きて、實もならぬかづらなどのあるなりといへり。下略

三十七 一うしろめたくや　好色の女なれば、あうてもうしろめたくやあらむと、思へり。肖　あだあだしき女なるべし。或抄に、うしろめたきは心もとなきなり。

一我ならで下紐とくな朝顔の夕かげまたぬ花にはありとも　夕かげまたぬとは、女のあだなるをいふ。我ならで人に契るな、夕かげまたずして、かはる中にもあだにはありともといへり。肖　他人に契るなどいふ心な

り。花にも下紐といへばかくいへり。女のあだにして、夕をもまたずかはりやせむといふ心也。愚　花のひらくるをば、ひもとくといへば、朝貌にそへてよめるなり。

一ふたりして結びし紐をひとりしてあひみるまではとかじとぞ思ふ

女の陳法してよめるなり。そなたよりいふに及ばず、二人して互に契りしを、一人してとくまじきとは、他にうつるまじきといふ心なり。

三十八
一がりいきたるに　業平のがりにゆくに、有常よそへ行きておそくかへるなり。稱　有常がもとへなり。がりとはもとへなり。か文字濁るなり。

愚　がりは許。

一君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや戀といふらむ　君を待つによりて、今日はじめて思ひならひぬ。世の中の人はかやうなるをや戀といふら　となり。

一ならはねば世の人ごとに何をかも戀とはいふととひしわれしも　我も戀といふことをならはねば、世の人ごとに何を戀といふぞと問來れりとなり。肖　君を思ふ心ゆゑに我も戀を知るといへり。詞は別なれど心は同じやうの歌也。稱　我ゆゑに戀を知るかなり。愚　人ごとには、世の人のことぐさ也。し文字は詞助也。

三十九
一西院のみかど　淳和天皇の御事也。愚　淳和天皇をば遺詔によりて、大原野に御骨ををさめたてまつりて、西院の帝と申すなり。肖　西山にをさめ奉ると云云。

一たかい子　勸物にみゆ。肖　崇子内親王、淳和御子也。承和十五年五月十五日薨。

一いまそかり　稱　おはしますなり。愚　おはしましけりといふ詞を、昔はかやうにいへるなり。

一おほんはふり　稱　はうぶりとよむべし。

一その宮の隣なりける男　肖　内親王の宮のとなり也。男は業平也。

一御はふりみむとて　肖　みむとは、あはれにも思奉る心なるべし。
一女車にあひのりて　愚　中將、女と同車して御葬禮をみけるなり。
一いと久しうゐていでたてまつらす　しばらく逗留あつて出したてまつるなり。
一うちなきて　肖　打泣きてとは、あはれをかけて歸らむとせしなり。
稱　此見物を待ちかねて業平いなむとする也。
一あめの下の色好源のいたる　稱　此段むつかしきなり。源のいたるは嵯峨源氏也。愚　源至はさがの天皇の御孫也。楊院大納言定の子也。從四位下左京大夫なり。順がおほぢとみえたり。
私云　源定―至―擧―順　融公は定の弟也。
一此車を女車とみて　業平の女とのる車也。
一とかくなまめく　愚　いたるが中將のあひのれる車を、女ばかり乘りたると思ひて、近づきよりてなまめきけしやうするなり。

一螢をとりて　五月の比なれば、螢を紗の袋などに入てもつ歟。愚　女のかほをみむとて、螢を車のうちへ入たる也。色好の人なれば、かかる用にかねて、螢を紗の袋などに集めてや持ちたりけむ。源氏の螢の卷に玉かつらの事をいへる同心也。
一車なりける人　肖　女也。愚　此螢の光にやみゆらむとて、螢をとりかくしたるを、ともしけちなむといへり。さて男その心を歌によめるなり。
一のれる男　肖　なりひらなり。
一出でていなば限なるべみともしけち年へぬるかとなく聲をきけ　今崇子の親王を葬り奉るが、鳥邊野へ出給はば、これが限にてましますべし。ともしけちとは如煙盡灯滅の心也。命のきゆるをいへり。年へぬるかとは、此宮八年をへたまへる事にも非ず、若くして世を去りたまふ事也。世間の無常はかかる物なりと、皆人の泣きなげく聲をきけとなり。稱　年へぬるかとは、此宮しかもわかき御年なりと也。

一いとあはれなくぞきこゆるともしけちきゆる物とも我はしらずな泣く聲をきけとよめるをうけて、まことにあはれに、泣く聲のきこゆるよといひて、さりながら我は更に眞實に寂滅とは思はず、一切衆生は法界の五大をかりに結びてきたまへり。法界の五大は消ゆるものとは、我は思はずとなり。是卽非眞滅の心なり。　肖　五大の火は消ゆる物とも知らずといふ心なり。

一なほぞありける　なほは直なり。ありのままによめるなり。定家卿自筆には、猶也。これもよき也。　稱　正直の心也。うへは猶の心也。時によるべし。

愚　天の下の色このみには、なほ此人こそあれと、いたるをいふなり。

一至は順がおほぢなり　是一の不審也。古き本にも注のやうにちとさげてかけり。注に見ても心得がたし。順は天曆の帝の時の人也。延喜の時分よりもありて、天曆の比の人歟。遙に後の順が事を、此物語にのする事如何。もし後人のかくか。至が系圖をいはむとて、順がおほぢとはかくなるべし。

稱　注の上にても知られず。順は梨壺の五人の內にて名人也。別段に書くも不審也。

一みこのほいなし　天の下の色このみの歌にては、なほぞありける。みこのほいなしと、上につづけて見るべきにや。其心は崇子の親王のためにはあまりほいなし。死たまへるもそれまでよとよめるは、あまりなりといへり。肖　心は內親王のため本意なきやうなり。歎ずべき事なりとなり。時宜にかなはぬをきらふ也。　稱　あまり觀じて愁傷をすくなくいひたるか、みこのためには本意なしといふ心歟と云云。　愚　父定卿の本意にはたがひて、いたるは好色の道ばかりにて、家をもおこさぬといふ也。

一四十げしうはあらぬ　愚　げしうは下習也。しなはいやしけれど、形心ばへげしうはあらぬといへり。　道　源氏物語にてはけしう清みてよめり。稱下ざまになきといふ心也。いかさまにげすしからぬ人也。源氏にけ文字濁る如何、さもよむべし。唯けもじすむべき也。　或抄　けもじすむ。師說同じ。

一さかしらする親　或抄　業平この女の家にきかよふを、親のさまたぐる也。

一おもひもぞつくとて　私にいはく、此男に女の思ひつきてはとてなり。

一人の子なれば　肖　業平の事也。さる人の子なればと也。　或抄　崇敬したる心也。

一とどむるいきほひなし　追ひやらむとするを、おしてとどめむともせざる也。愚　親まかせなればいきほひなしといへり。

一女もいやしければ　年の若きをいふ。肖　上詞に下すしからぬとあり。いやしといふは年の若き事也。朝廷莫如爵、鄉黨莫如齒の義也。

一すまふ力なし　私云、此物語の奥にすまひけれどといへると同じ心也。すまひけれどとは、愚見にいやがる心なりといへり。ここも又此女を追ひやらむとするを、若ければいなと恨る力もなきなり。

一女をおひうつ　逐の字也。儒書史籍にも逐の字をおひうつとよめり。稱　おひやるなり。ちやうちやくするにあらず。肖　へだていさむる心也。

一血のなみだ　つよくかなしきには血になく也。大和物語に、僧正遍昭泊瀨にて血になきし事あり。私云、血涙の濫觴は娥皇女英也。韵府竹部云、舜南巡不反、葬於蒼梧、娥皇女英追之不及。至洞庭山、淚下染竹即斑、死爲湘水神。博物志　方輿勝覽廿四道州部云、斑竹岩在營道縣南五十里多小斑竹。相傳云、舜葬九疑二妃尋湘水以手拭淚把竹、遂成斑色也云云。才調集、斑竹詩云、殷痕苦雨洗不落、猶帶湘娥淚血腥云云。

一ゐて出でていぬ　愚　母がむすめをつれていぬるなり。

一出でていなば誰か別の難からむありしに勝る今日はかなしも　此女を追出さば、我もまた此世に迹をとどめまじき程に、我もわかるべければ、別はかたからずとなり。さあればありしにもまさりて今日はかなしきと

なり。肖　五文字は彼女を追出す事也。ありしにまさるは、こし方は頼むかたもあればなり。愚　出でて行くに煩ひなくば、たれか別れむことのかたかるべき。外へいなぬほどはあはねども、なほざりにかなしかりしを、いぬる日になれば、ありしものおもひは、數にもあらぬとよめるなり。

一たえいりにけり　肖　絶入したる也。或抄　業平也。

一親あわてにけり　女の親也。

一なほ思ひてこそいひしか　私云、か文字すむべし。道　業平の事を思ひ申してこそ、よそへはやれといふなり。

一しんじちに　私云、底から女をふかく思ふなり。

一むかしのわか人　道　伊勢の詞也。今の翁とは若人に對してかけり。世の末の人は人を思ふことも深からぬよし也。愚　若き人をも心おとなしきをばおきなといふ也。私云、わか人はわかうどとよむ也。

四十一

一女はらから　兄弟也。私云、同胞ともかく也。

一あてなる男　業平也。肖　此女は姉なるべし。愚　あひにあうたるしなを、あてなるといふ、いやしからぬ心也。

一うへのきぬ　肖　袍也。

一手づからはりけり　稱　手にかけず、みはからふ事をもいふべし。

一さるいやしきわざも　或抄に、女は三從とて、若年にては親に從ひ、中年にては男にしたがひ、老年にしては子にしたがふ。然者男に隨ふはかやうのいやしき事をもするなるべし。毛詩にも服澣濯之衣といへり。

一いと心ぐるしかりければ　或抄に、わが女のゆかりなれば、業平心ぐるしきなり。師說に云、かりければかもじ濁る也。

一いときよらなる　或抄に、あたらしくうつくしきにや。愚　きよらは清む也。

一ろうさうのうへのきぬ　六位の袍也。愚　綠衫とかく也。稱　いやしき男とは六位也。

一紫の色こき時は目もはるに野なる草木ぞわかれざりける　紫をば女にたとふ。業平の女に寵の深き時は、其ゆかりまでもわけず、あはれに思ふとなり。野なる草木とは其ゆかりをいふ。肖　紫の一本ゆゑに思ふ也。

愚　めもはるには目もはるかなる也。或祕抄に、色こきとは寵愛のさかり也。又或祕抄に、めもはるは、目もはるに見渡す野邊の草木、いづれもむつましき心也。又或祕抄に、いやしき男とは、伊與介小野良行妻也。貞觀十二年十二月也。

一武藏野の心なるべし　愚　これは古今十七歌に

紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞみる

とある是を本歌にして中將のよめると、物語の作者の釋したる詞也。紫のゆかりといふ事は此歌よりいひ來れる事也。或祕抄に、舒明天皇の御時、笠清丸といふもの、武藏介にて住みける時に、上洛すとて妻をとどめて上りぬ。妻跡にて病ひして死ぬ。後夫下りて妻の死にたる野をみれば、紫のはかまをみて主はなし。これくさりて紫となる。これより紫の一本ゆゑに、草木までも武藏の野中はなつかしといへり。或抄に、紫は武藏に生ふる草也。頓阿注云、紫一本は橘是公大臣妻武藏國にて死す。其墓より紫は生ふる也。又或祕抄に、紫のある所は殊に草までも匂ひてなつかしとなり。紫は女の異名也。或抄に、みながらは皆ながらなり。

四十二　一色このみと知る知る　或抄　好色すぐれたる女也。愚　小野小町が事をいへり。

一にくくはたあらざりけり　我ばかりを憑むまじきものと知りながら、にくからぬなり。愚　はたは將字也。又といふ心也。

一しばしばいきけれど　稱　しげくゆくなり。

一さりとていかではたえあるまじかりけり　うしろめたくあるとて、其儘行かずしてもいられぬなり。愚　いかではゆかでなり。

一なほはたえあらざりける中なり　愚　いかではたえあらざる中とい

ふ心也。上の詞を返返云也。　道　うち憑むべきやうにもなきなり。

一二日三日　或抄　世中のさはりありていかずなり。

一出でてこし跡だにいまだかはらじを誰通路と今はなるらむ　此色好の女は、我出でてこし跡より、誰人の通路とか今はなるらむとなり。

一物うたがはしさによめる　或抄　女の心うたがはしければなり。

一四十三かやのみこ　勘物にみゆ。桑花物語に、昔かやのみことといひし人こそ、さいくはかしこかりけりとかけり。　愚　賀陽親王は桓武第七の子、母夫人多治比氏、二品治部卿までなり給ふ。貞觀十三年十月八日薨、年七十八。

一人なまめきて　肖　賀陽親王のおぼしめす女に、業平のなまめく事なり。　愚　中將なまめきよりて、此女に物いひけるなり。

一我のみと思ひけるをまた人聞きつけて　業平の我のみと思ひたるに、かやのみこの御寵愛ときつくるなり。

一時鳥のかたを　或抄　繪にかきたる也。　肖　同前。

一時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふ物から　ながなくは汝がなく也。時鳥汝がなく里のあまたあるほどにうとましと思へども、なほ思はるるといへり。　肖　うとましきは恨る也。　稱　かやのみこの御寵愛とて業平のうとむ也。顯注密勘に、萬葉には汝字ながとよめり。定家卿も此義同心とみえたり。或祕抄に、

　咲けばちる花の浮世と思ふにもなほうとまれぬ山ざくらかな

俊成卿女の歌也。是は本歌の詞をくだきて、うとましくはなしとなり。或祕抄の一義に、思ふ人の心あまたあれども、なほ人の我はうとまず思ふ物ならばと、戀しさにのみ忘れずとなり。又或祕抄に、ながなくといふに有多義、一にはおのが名を時鳥といへば、やがて我名をなくといへり。二には三月ほどもなければ永鳴と云也。三には汝がなく也。私云、汝がなくを諸鈔に宜說といへり。又或祕鈔に、なれがなくといふ心なりと云云。　愚　心の多き女にたとへていへり。　私云、物からは思ひながらといふ心にあらず。何時も

物からは物ゆゑといふ心なり。ここも心おほき女なれば、なほうとましくはあれど、我心のそなたへひく故に、うとみもはてず思はるるといふ義也。

一この女けしきをとりて　我を疑ふかと業平のけしきをとるなり。稱取也。かやのみこの事を、業平推すると女の思ふ心也。愚　氣色をとりては中將の機嫌をとりてよめる也。

一名のみたつ死出の田長は今朝ぞなくいほりあまたとうとまれぬれば死出の田長は郭公の別名也。古今に、

いくばくの田をつくればか時鳥しでのたをさを朝な朝なよぶ

此歌は、時鳥ならで別にしでの田長とてあるやうに聞え侍りと、禪閤の愚見抄にあり。此歌にて別名とは決せる也。郭公の鳴く里數多あると名にたつる程に、それゆゑに我は今なくといへり。今朝は今といふ心なり。私云、後撰集抄に云、ほととぎすの名十三あり。しでの田長其内也。一郭公、二時鳥、三苦歸樂鳥、四三月こす鳥、五士田田長、六繼鳥、七うなひご、八沓手鳥、九無常鳥、十過時不熟鳥、十一いもせ鳥、十二こひし鳥、十三あみ鳥　私云此分の異名あり第一に郭公とは昔郭公の國の王にてありしが、他國とたたかひける時、敵にせめられて北國に來て寒にせめられ、死して後鳥となれり。文選云、郭公去南壽再不飯、戀亡婦垂紅淚といへり。二には時鳥といへば鳴くべき時を知りて卯月五月に來てなけばいふ也。三にはくきら鳥とは苦歸樂とかけり。此鳥の死して後に地獄に落ちて地獄の鳥となれり。されば夏は婆婆に來て、春秋冬は地獄にありといふ。地獄にある時は苦にて、ここに來る時は樂なる故に、苦飯りて樂となるといふ也。四にはみつきこす鳥といふは四五六月の三月なきすごす鳥なればいふ也。黃門は正二三月を過ごして、四月にきたるを三月すぎ鳥といふ、是實義也と云云。五にはしでの田長といふ事、死出の山を越えてくるとみえたり。

四手の山こえてやきつる時鳥戀しき人のうへかたらなむ

といふ古歌の心也。又唯田をもよほす故にいふともみえたり。六にはらん

る鳥といふは、縷縷はかはぎぬの名也、此鳥木の中などに冬は住みける時、毛むくむくとして皮ぎぬの如しといふ也。七にうなひ子といふは、此鳥地獄にては童にて、娑婆に來る時は鳥となるが故にいふ也。八にはくつて鳥といふは二說あり。一には堀田鳥といへり。是は農夫の義也。二にはくつぬひの義也。昔此時鳥、佐宇里といふ人にてありけり。沓をぬうて賣る人也。時鳥といふ人來て沓をとりてかはりをなさず。二人ながら死して後鳥となれり。佐宇里はほととぎす也。時鳥は鵙となれり。さて昔の沓のかはりをこはむとて、くつをなせなせと鳴くを時鳥といへり。九には無常鳥とは、此鳥無常をすすむるといへり。故に經說に云、別都度幾世、是はみやこを別れよ、いくばくの世をわたるぞと、人につぐるぞといふ也。十には過時不熟鳥といふ。田つくる人に、田をつくらばとくつくれ、時過ぎぬればみのらぬとすむるにたとふる也。十一にはいもせ鳥といふは、此鳥きはめてとつぎにたへぬ鳥にて、あまり切なる時は鶯にもとつぐといへり。十二にはうれしといふ。是は昔の妻を戀ふる義也。十三にはあみ鳥といふは、昔の人のいふ、此鳥を網にかけてとりおきて、明年初音を早くなかせばやといへるより名づくと云云。或祕抄に、古今の歌のしでのたをさを朝な朝なよぶとは、死手の山を越えて四五月の間に農業をすすむる鳥なればかくいへり。たをさの聲は作田迷せよ、過時不熟となくといへり。朝な朝なよぶとは、我名にはあらざるやうに聞えたり。其時は百舌鳥と時鳥との二鳥因緣也。今の鵙は前生沓あつらへたるもの也。時鳥は沓作也。四五月の時分に必ず沓の價を出さむといひて、終に出さず。今乞ひまはるは沓作也。是則郭公也。さてきてなく時は、もずの贄とて、藪原などに物の莖に蛙などの小蟲等をさし置きて、我身はことごとしくといひてかくるる也。此因緣をよめり。私云、後撰の注と此祕抄の義と異說あるによりてなり。顯注密勘に云、敎長卿はしでの山にては男にてあり、童蒙抄にはわらはにてこゆといへり。知りがたき事どもなれば不及沙汰。抑郭公はもずといふ鳥の本の名なりといへる事

あり。彼もず昔沓ぬひにてありける。郭公の沓てをとりて、今四五月のほどにたてまつらむとて、すかしてかくれにければ、それを尋ぬとてよびありくによりて、郭公の名を得たるなり。此よびありく時鳥はもとの鵑也。かのかくれありく鵑は本の時鳥也。太后百番の歌合云、

郭公　なきつる夏の山邊には沓手いたさぬ人やあるらむ

此心をよめり。私云、漢語にも時鳥の名數多あり。爾雅釋鳥に巂周。子巂鳥出蜀中 韻會巂雉、雉、鵗、此四つ同字也。一名怨鳥、甌越間曰||。事文類聚四十四 一名子規、江介曰||。同上 一名杜宇、蜀右曰杜宇。同上 一謝豹自呼曰||。同詩學大成廿七、格物論、杜鵑一名杜宇、一名子規、三四月間、夜啼達旦、惟田家候其鳴、興農事、自呼謝豹思歸樂、其音不如皈去。一蜀杜宇號望帝、亡去化爲子規。寰宇記 一蜀魄卽杜宇 祖庭事苑 一杜宇曰杜生、自天而降稱望帝、好稼穡、至今蜀人將農者必先祀杜生。同上成都記 一證類本草十九、布穀、江東呼爲郭公。

一庵多きしでのたをさはなほ頼むわが住む里にこゑしたえずば　よし

そなたには庵數多ありとも、我にだにたえぬならば、なほたのまむといへり。

四十四

一あがたへ行く人　ゐなかへ下る人也。有常が事也、

一むまのはなむけ　私云、ただ旅へ行く人へのはなむけ也。

一うとき人にしあらざりければ　業平は有常がむこなればうとき人にあらずといふ。

一いへとうじ　愚　家童子とは妻をいふ詞也。　稱　外人にてもなきほどに我妻を出す也。

一女のさうぞく　裳からぎぬのやうなる物也。

一かづけむとす　私云、人に物をいだす事也。又は遣はす事也。

一あるじの男　肖　業平也。

一ものこしにゆひつけさす　愚　裳の腰に歌をよみて結付る也。

一出でてゆく君が爲にとぬぎつれば我さへもなくなりぬべきかな　い

でてゆく人の爲に、衣をぬぎてやれば、我さへ裳がなくなるとなり。もは喪の字也。喪の字をばわざはひとよめり。衣裳のもなくといふを以て、禍なくといふ心をよめり。人によきことをあたふれば、我にもよき事あり。陰德陽報也。　稱　女にかはりてよみたる也。喪、萬葉に是をわざはひといふ心に書くなり。わざはひなくといふ心なり。はなむけはさいの神につつがなくと手向る心也。我さへもなくは此方にとどまる我も、わざはひなくといふ心也。

一此歌は　時の花に對し月にむかひて、其當體をば誰もよむものなり。こは旅行の人に、女の裝束をだすとよめば、風情もなし。一大事の難題なるをやすく面白くよめる也。　肖　此時此やうを題にて歌よむべき事、裳の題などにかはりて逸興なる事也。よまむも難義なるべければ、心とどめてよまするとも也。此歌を業平によますする時の心也。

一はらにあぢはひて　業平の沈吟してぞ案じつらむとなり。　稱　はらわたをこらしてよめる心なり。

一人のむすめのかしづく　いつき女也。四十五

一いかで此男に　稱　業平にこころざしあり。

一物やみになりて　肖　物思の病となる心なり。

一かくこそ思ひしかと　此女めのとかなどに、ざんげするなるべし。

一なくなくつげたり　女の親が、業平の方へ御出ありて御覽じてたまはれといふ。

一つれづれとこもりをりけり　業平の仁心也。　稱　更に業平の見ず知らぬ女なれども、我ゆゑに思死にたるところを、感じていみにこもるなり。

一時はみな月　六月の下旬の頃也。よひは納涼する也。

一あそびをりて　愚　うれへの中に遊ぶべきにあらず、よひの程すずむをいふべし。

一夜ふけて　六月晦日なれば、はや秋風もおとづるる也。

一螢高く飛びあがる　何とやらむ風情が面白き也。

一ゆく螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ　後撰には秋部に入たり。雁を本にしたるにや。ここは夏の歌也。よひの程は暑氣甚しきやうなるが、夜ふけて身にしむ風の吹きて、仲秋八月の天のやうにおぼゆるに、をりふし螢が高く飛ぶ也。蒹葭水闇螢知夜の體也。とく雁をもよほしたてよといふ心也。愚　つげこせは、既に秋風こそふけと雁に告げおこせよと也。或抄に、

銀燭秋光冷畫屏　輕羅小扇撲流螢
玉堦夜色涼如水　臥見牽牛織女星

一くれがたき夏の日ぐらしながむればその事となく物ぞかなしき　忌にこもる體也。上の歌は夜の歌也。これは晝の體をよめる歌也。其事となくの詞面白し。我を思ふゆゑになくなるといふ人の忌に籠るが、あひそうたる事もなし。何事を名殘にせむともなきに、かなしきは、其事となく物ぞ悲しきなり。稱　ゆく螢の歌と一所に書きたれど、同時によみたる歌にはあらず。唯ここへ書き加へたる也。

一四十六うるはしき友　業平の友也。朋友の交は親子よりもうるはしきもの也。愚　まことの友達をいへり。是も女をいへるにや。私云、女とある事甚以誤也。

一人の國へいきける　任に赴くに一任四ヶ年や五ヶ年也。さやうの時の事なるべし。唯隨意に人の國へ下るにはあるべからず。稱　是は任國へ赴く事なるべし。

一月日へておこせたる文　ゐ中よりおこせたる文也。

一あさましくたいめん　或抄に、これより以下文の詞也。

一月日のへにけること　宵よみきるべし。

一めかるれば忘れぬべき　細細みえしたがはねば忘るるものなり。宵

我は忘れずといふ詞也。愚　久しく對面せぬ事也。私云、めかるとは萬葉

に目離とかけり。

一あめれ　あんめれとよむなり。

一目かるともおもほえなくに忘らるる時しなければ面影にたつ　こなたはめかるともおぼえず、忘るる時なければ、常に面影のはなるる事なしとなり。

四十七

一ねんごろにいかでと　愚　ねんごろにいかであはばやと思ふこころなり。

一女ありけりされど　肖　此女あだなりと業平を思ふ也。

一おほぬさのひくて數多になりぬれば思へどえこそ憑まざりけれ　大麻は祓の具也。あれこれの手を觸るる物也。あれこれがひく手多きほどにたのまれずと也。顯昭云、おほぬさとは祓するに陰陽師の持ちたる串にさしたる四手也。祓はてぬればこれを各ひきよせつつなづるものなれば、人のもとごとによれども、とどまらで過ぐるものなれば、引手數多にとまらねばと讀める也。或祕抄に大幣とかけり。大麻ともかけり。幣帛を持ちて人の前ごとによれば、ひきよせて各に呪ひて後に川へ流すものなり。是によりて引手數多とよめり。又或祕抄に、大ぬさはみてぐら又は榊に麻のをつけたるをもいふ。此ぬさはみそぎなどする時、數多の手にとりうつして、身の祈をする物なれば、ひとりにとまらぬ男の心をたとへて、思へども え頼まずとはいへるにや。又或抄に大ぬさは幣の手をあまたにきりかくるをいふと云云、當流此説不用也。或祕抄に、是は二條の后の歌也。

一大麻と名にこそたてれ流れてもつひによる瀬はありてふものを　おほぬさはあれこれの手をかくる物にてはあれども、祓してながせばよるせあり。つひのよるせにはそなたをこそ思へとなり。顯昭云、かくとまる所なきやうにて、數多の所へかよへど、つひに君が許に留るといふ也。定家卿所存同。愚　ありてふ物はありといふ物をの心なり。或祕抄に、つひとは萬葉に後といふ字をかきてつひとよめり。

四十八
一馬のはなむけ　旅へゆく人に、馬のはなむけせむとすれば、おそく來るを待つなり。

一今ぞ知るくるしきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり　人を待つ事はくるしきもの也。人にまたるといへば、萬事さしおきてゆくべき事にてあるよと、我心に領解するなり。此句法面白し。私云、業平家集前書には紀のとしさだが阿波介にまかりける時にむまのはなむけせんとて、今日といひおくれりける時に、ここかしこにまかりありきて、夜ふくるまでみえざりければつかはしけるとあり。或祕抄に、紀利貞が阿波介にくだるといふは清和の御時也。貞觀六年の事也。或祕鈔に、人またむ里と下へつづけてみるべし。又或祕抄に里をば不離也。利貞がおそく來る間、我を人のまたむ時おそくはゆかじとなり。

四十九
一いもうとのをかしげなりけるを　肖　業平のいもうと也。愚をかしきはほめたる詞也。或抄にうるはしきをいふ。かほかたち世にすぐれたるなり。史記に形麗貌とて、うつくしき事を、をかしげなりといへり。麗、此字ををかしきとよむ也。

一うらわかみねよげにみゆる若草を人のむすばむことをしぞおもふ　常には業平の妹をけさうしてよむといへども然らず。妹をふびんに思ひて憐愍の心にてみるなり。ねよげは草の根によせてぬるかたをいへり。我は妹を子細なしとみれども、人の心は萬差なれば、何たる幸をもひかずしてやあらむと心苦しく思ふなり。此心末にて見えたり。稱名說、同前ながら、なほ委しく注す。業平の懇に思はるるといふ心也。好色のかたにあらず。古注には心をいもうとにかくるとあり。不可然、憐愍の心也。其心行末にみえたり。此いもうと敏行に通ずる也。其時の返歌を業平するなり。肖に又の義にいもうとをけさうしていへる心もありと云云。師說にいはく、此義業平妹を憐愍の心もあり。又裏說は嫉妬の心もありと云云。

一初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな　めづら

しきといはむとて初草とおけり。業平の思もよらぬ詞をかくるものかな、此程までうらなく底に徹して、わが事を思ふことのありがたさよとなり。源氏のあげまきに、匂ふ兵部卿宮の一品の宮に繪みせまゐらせらるる時、うらなくものをといひたるを、姫宮もされてにくくおぼさるといへり。

愚　草のはじめて萌出でたるを、めづらしき言の葉といへり。肖　けさうしたるをとがめてよめる心もありと云云。

一五十うらむる人をうらみて　人の方より業平を怨むを、其人をうらみかへすなり。ここより四五首はあるまじき事どもをつらねてよむなり。

一鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬ人を思ふものかは　卵を一つかさねむもすべりてなりがたし。百の卵は何か重ねらるべきぞ。あるまじき事をいふなり。世間のあぶなき事を累卵といふ。文選注に說苑をひき、晉平公が時に九層の臺をつくる。荀息が是を諫むとて、臣はよく棊子を十二かさねて、其上に卵九をかさぬる事をすといふ。平公曰それは危き事也。荀息がいふ、これ危からず。公の九層臺を作りて百姓を煩す、是甚危き事也といふ。平公領解して臺作る事をやめたり。文選注には、平公を靈公とし、棊子の術する者を孫息としたり。ここは故事機緣の方にはあらず、なるまじき事にいふなり。縱あるまじき事はありとも、思はぬ人を思ふといふ事はあるまじきとなり。私に韻府に、晉荀息曰。臣能累十二棊子。加九卵於上。靈公曰危哉。息曰不危。公造九層臺三年不成。男不耕。女不織。亦甚危矣。公遂止。說苑 詩學集成八詳之。かれこれを案ずるに靈公と見えたり。平公は善人なれば、此臺作る事などはあるまじきなり。又孫息とある事不審甚也。愚　日本紀の第一に、鳥の卵といふべき所に鳥の子といへり。十づつ十は百の數也。本文に百卵をかさぬるといふはあやふきたとへなり。或抄に此本文を勘て、陣鴻報恩記云、恩至恩父母恩也。縱以禽子空上百數百度重其上。恩難報。私云、この本據詳ならず、難信用也。

一朝露はきえのこりてもありぬべし誰かこの世をたのみはつべき　電

光朝露はあだなる物にいへり。露は朝ばかりおきて日影にきゆるなり。自然朝露はきえのこりてもありぬべし。いもせの中などはたのみはつまじきとなり。稱　是は無常にはあらず、いもせの契の事也。夫婦の間はたれもたのむまじき事也。愚　大かたの世をいふやうなれど、男の心のあだなるをうらみていへるなり。肖　此世とは夫婦の間の世の事なり。

一吹く風にこぞの櫻はちらずともあなたのみがた人のこころは　今年の櫻なりともちらずしてはありがたし。去年の櫻が何か殘ることあるべきぞ。それは殘ることありとも、人の心はたのみがたしとなり。こぞの櫻といへるが一重起してみるなり。或鈔に文集云、縱舊年之花殘、梢待後春難、愚是傍人心也。

一行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり　私云、相傳之祕抄に、小町業平を恨みて詠之と云云。或祕鈔に日本紀云、左大臣藤原內丸が娘を、藏人なりける人思ひかけて忍び忍びにいひければ、女云、我に志ふかくばわがもとに毎夜來り、曉かへらむ時は、我家の前なる川に、宿直の數をかきつけて、百夜みたむ時あはむといふ。叶はずと思へども、男志深ければ、女のいふままに、とのゐの數を水の上にかきつけしに、百夜になる曉、女この事を問へば、かきたりと答へつつ、女を具して見るに、文字なければ女あはず。其時男のよめる。

さりともと數かく水はあともなし君がつらさはつらさなれども

水の上に數かくことは我命いもにあはむとうけひつるかな

とよんで、やがて其川に身を投せり。私云、此因緣日本紀にといへり。續日本紀なるべし。時代相違せり。又左大臣內丸と云云、是亦右大臣也。又水の上にの歌は萬葉十一卷にあり。萬葉の目安にいふ、うけひは祈る心なりと云云。又或祕鈔に顯注密勘に經文に云、此身無常念念不住。猶如電光暴水幻炎。亦如畫水隨書隨合。又或說に、巴江學字流といふ心をも含むといへり。當流不用說也。

一ゆく水と過ぐる齢と散る花といづれまててふ事をきくらむ　前の歌にいへるものをとり集めてよめり。日月のゆくは山水の如し。過るよはひまたとどめられず。散る花ささへがたし。これらはおほふばかりの袖ありてもとめられず。いづれも待てといふ事をきかざるものなり。稱　前の歌三首を一首に引合てよめるなり。

一あだくらべ　物語の作者の詞なり。肖　伊勢が詞也。

一しのびありき　身を治めずして、好色をもてあるく者のしける事といへり。

一五十一人の前栽に菊うゑけるに　私云、業平家集には、人のもとなるせんざいに、結びつけ侍りけると云云。或祕鈔に、人の家の前栽といふは、遍昭が花山の家の菊を、二條の后宮に奉り侍るとなむ。同又祕抄に、人の前栽といふに心あるべし。祝言の心をふくませよむべしとなり。

一うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへ枯れめや

栽しうゑばとは重詞也。うゑおくならばといふ心なり。春秋はきはまる限なし。此花を栽置くならば、秋のなからむ事は知らず、咲かぬといふ事はあるべからず。花こそちるとも、根の枯るる事もあるまじきなり。千秋萬歳たるべしといへり。人の花などうゑたらむ時は、此心をもてよむべし。稱　うゑおかば也。或祕鈔に、うゑしうゑばとは、し文字やすめ字也。過去のしにあらず、重ねていひたる詞也。經説に、善哉善哉といひ、四書五經にも二度いふはいたむ事の甚也。切なる事を重ねて云る詞也。さて歌の心は、此花仙郷の物なれば、四季を不分常住可有こそ本意なるに、秋くれて花こそうつろふとも、本の根ざしさへ枯れては、名物のかひもあらじと也。是をうゑしと過去のしにいふ事ある歟。當流には唯重詞にして、仙郷の心をふくめるなり。尤是を可用也。或祕抄の一説に、秋なき時さけといはばこそ無理なるべけれ、秋といふ事のあらむ限は萬代も咲けとなり。又或祕抄に、抑菊に花ちるといふ事難心得。菊は花ちることなし。但花はちる物なれば、よろづの花

におほせてちるといふなり。白樂天詩に、黃菊花濃風散砌。紫房匂盡雨香遲といへり。これは菊のちるとつくれり。文集にあり。或口傳に云、雨露にあたらぬ菊はちる事おのづからありといへり。私云、文選卅三、屈平離騷經云、朝飲木蘭之墜露兮。夕餐秋菊之落英といへり。又詩學集成十、王荆公詩、殘菊飄零滿地金。歐陽公戲之曰、秋花不比春花落云云。此古事韻府菊字詳之也。

五十二
一かざりちまき　ちまきを絲などにて卷きたるをいふ。拾遺の詞などにある事なり。稱　むかしはいまのちまきをうつくしき絲にてかざりたるなり。唐の楚國よりのことなり。愚　五月五日のちまきを、五色の絲にてゆひたるをいふ。拾遺集第十八の詞にも、ちひさきかざりちまきとみえたり。私云、粽粽同字也。玉篇には竹葉を以て裹米といへり。韻府には以菰葉裹米といへり。詩學集成六端午部續齊諧記、原此日投汨羅死楚人哀之。至是日以竹筒貯米祭之。漢建武中長沙歐回(區曲イ)白日忽見一人自稱三閭大夫謂曰。君常見祭甚善。但常所遺苦蛟龍所竊。今若有惠可以楝樹葉塞其上。仍以五綵絲縛之。此二物蛟龍所憚也。

一あやめかり君は沼にぞまどひける我は野に出でて狩るぞわびしき

あやめにて粽をすることはなけれども、今日はあやめを賞する日なればかくいへり。先かざり粽おこせたるを謝したり。そなたは沼にまよひ出で粽をしてたまはれり。我は野に出でて狩をするとて雉をやる也。

五十三
一あひがたき女に　詞書を心におきてこの歌をみれば勢あり。細細あひ逢ひて、物語せむだにものこり多からむに、あひがたきにあへる心さぞと思ふべし。

一いかでかは鳥の啼くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ふかきに　肖　此歌はかくれたるところなし。ただよく詞書に思合せてみるべし。思ふ心の夜深きは殘り多き心なり。稱　あひがたきといふに、いかでかは鳥のなくらむの深切なるところをみるべし。ただなる人に逢ふとも、鳥のなくはうかるべきに、ましてあひがたき人にあふ時のさまを思ふべし。

五十四 一行きやらぬ夢路をたのむ袂には天つ空なる露やおくらむ　たどる、天福の本にはたのむとあり。せめて夢にあはむと思へば、夢にもあはずして たどる程に、袂に露をおくなり。此袂の露は常の天つ空なる露にてはあるべからず、思の露こそおくらめとなり。露やおくらむといふをとがめて見るべし。後撰には天つ空なきとあり。　肖　夢のうちにも行き通ふことやすからねば、夢路をたどる袖には、大かたの天つ空なる露やはおく、かなしき思の露こそおくらめといふ心也。露やおくらむといふをとがめていへば心得らるるなり。

五十五 一えうまじう　遂に我手にまはるべきやうなきをいふ。

一思はずはありもすらめど言の葉のをりふし毎に頼まるるかな　そなたにはありつる物とも思はずもありやすらめど、こなたにはこし方の言葉のをりふし毎にたのまるるなり。

五十六 一ふして思ひ　詞書深切也。歌はあさあさとして、詞書に相應せぬやうに見えたれども深き歌なり。

一我袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり　わが袖はなべての露もおきあまりたるやうなり。草の庵をみれば、深き露のやうなれども、我袖はそれよりもなほまさりて深き露也。いつもひがたき露をいふ。愚　露はなみだをいふなり。

五十七 一人知れぬ物思ひけり　或鈔に、深く忍びたるなり。

一戀ひわびぬ蜑のかる藻にやどるてふわれから身をもくだきつるかな

五文字が肝要なり。年月いかさまにせむと思ひ來れども、何のかひもなくうち過ぎて、すぢなき事に辛勞して年月を送りたり。これはわれから身をもくだきつるよと身を觀じてよめり。愚　われからは和布のりなどにつきたる、こえびのやうなるものをいふ。それを我心からといふ詞にとりなせるなり。

五十八 一心つきていろこのみ　物おもひに心をつくしたる也。稱　此段はい

かいにかくなり。　愚　こころつくとは人のおとなになるをいへり。私云、
此愚見說甚以誤也。
一ながが岡といふ所に　稱　西京の事なり。
一宮ばら　愚　桓武天皇の皇女あまた長岡の京にすみ給ふをいふ。
一こともなき女　宮仕の女どもなり。稱　ほめたる詞也。無子細女也。
肖　よき人なるべし。皆つかへ人なり。愚　無事なる心なり。あしくもな
き女といふ心なり。
一ゐなかなりければ田からむとて　業平のすむ所をもみ、又いひよらむ
とていへる辭也。此段俳諧のやうにかきなせり。愚　片田舍なれば其所
の民の田刈るをみるなり。必ずしも身づから刈るとはいふべからず。稱
狂言にいへるなり。山田近きところか。
一いみじの　私云、ほめたる詞也。
一すきもののしわざにや　業平の家居の興あつてしなしたるをいふ。

稱・業平の家づくり粗相なれどもみごとなり。
一入りきければ　或鈔に、女どもの入りきたるなり。
一あれにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ　業
平のかくれたるほどに、あるじのなき心にて、おさへてあれにけりといふ。
あるじもなく人もなきは、幾世の宿にてかあるらむ。住みけむ人のおとづ
れもせぬよといへり。或祕抄に、伊豆內親王長岡に住みたまふとき、貞觀十
一年十一月十八日(二イ)によばせ給ひければ、業平いそぎいきぬ。其時の母の歌
老ぬればなり。此物語の奥にあり。さて業平行きたりしに、嵯峨の姫宮正子
內親王これも長岡に住みたまひけるに、彼の宮のうちに、民部伯耆とて二
人の女房ありしが、業平を見にゆきたりしに、業平家のおくにかくれたり
ければ、民部がよめる歌也。民部は民部大輔三善成房が娘也。伯耆は出羽守
源惟興が娘也。私云、然者前の宮ばらとは桓武天皇の皇女といへり。今又こ
こに嵯峨天皇の皇女とあれば相違せり。猶勘へて可決也。又或相傳の祕抄

に、下心は世のにごりふかくして、人の心のまがりよこしまなるを、あれたる宿といへり。住みけむ人の音信もせぬとは、仁心の失ひたるをいふなり。仁の機は人にあるものなれども、心ともち失ふことわりなり。それを歎く心なるべし。

一といひて此宮にあつまり　師説に云、この宮は業平の家なり。平城阿保等の宮の跡に住むゆゑ此宮といふなり。

一葎生ひてあれたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり　前にあれにけりといふ歌をうけていへるなり。鬼とは女をいふ。葎は生ひてあれたる宿のうれはしきを、女どものあつまるが、さらに本望にもあらずとよめり。女を鬼といふは、安達の原のくろつかに、鬼こもれりといふは誠かとよめるも女の事也。愚　うれたきはうれはしきなり。鬼は女なり。なにぬねのは五音通ずるによりて女を鬼とはいへり。すだくはあつまるといふ心なり。黒塚といふところに、重之が妹あまたありと聞えて平兼盛のよめる。

みちのくの安達が原のくろ塚に鬼籠れりと聞くはまことか

拾遺集にいりたり。女は人をばかすものなれば、鬼にたとへたるにや。或祕鈔に、文選に見老女とよめり。

一とてなむいだしたりける　私云、家のおくより、右の返歌をよみていだすなり。

一ほひろはむ　前に田刈らむといひしほどに、またここにもほひろはむといふ。肖　これもたはぶれなり。

一うち侘びて落穂ひろふときかませば我も田づらにゆかましものを

そなたに落穂ひろふといふほどに、我も同道せむものをとなり。悉皆俳諧也。稱　人のおちぶれたる事をいふなり。

一京[五十九]をいかが思ひけむ　前にも京や住みうかりけむとありしなり。肖　業平左遷の時分なるべし。先都を出でて東山にありしにや。

一住みわびぬ今は限の山里に身をかくすべき宿もとめてむ　義はあらはなり。後撰には、爪木こるべき宿もとめてむとあり。愚　いづれも本歌にはとりてよむべきなり。俊成卿歌、

住みわびて身をかくすべき山里にあまり隈なき夜半の月かな

今はとて爪木こるべき宿の松千代をば君となほ祈るかな

一物いたくやみて　肖　物思の病氣となりて絶入したるにや。愚　戀の病をして身をほろぼすなり。入相ばかりに絶入りてと上にみえたり。同時のことにや。

一面に水そそぎなどして　冷水灑面の心なり。絶入したる者には、面に水そそげば蘇生するなり。

一我上に露ぞおくなる天の川とわたる舟の楫のしづくか　水をそそがれていき出でて、これは世の常の此世の露にはあらじ。天川のとわたる船のかいの雫にてぞあるらむとなり。或祕抄に、業平二條の后を戀奉りて感にたへず、貞觀四年七月七日絶入して詠之と云云。此歌古今の第十七にあり。口傳別紙に注す。

一いきいでたりける　絶入して歌よむことかたかるべきにや。造次顚沛其道を忘れぬ所の奇特なるものの也。

一宮仕いそがしく　朝家奉公のみにして家にゐる事なきをいふ。稱業平禁中にのみあるなり。

一心もまめならざりける　業平の家をかへりみる事なきなり。肖　業平の眞實に女を思はざりける時分となり。愚　女のあひしらひまめまめしからざるなり。

一家とうじ　肖　古注には小町と云云。誰にてもなるべし。

一まめに思はむといふ人に　獨住のやうにあらむよりは、よく思はむ人あれば、それにつけよと媒のいへるにつきて、人の國へいにけり。稱　業平の妻をそそなはかすなり。ひまもなくて内にもすまれぬほどに、別の人

に嫁よと人のいふなり。　愚　この女たのもしげなく思ひてほかの國へいにけるなり。

一此男宇佐の使にて　業平の宇佐の使にたてる也。上古は宇佐へはしげく使立てり。何時も朝家に事あれば、使をたて給ひて尋ね申されて、其神勅によりて定められし也。しかるを孝謙天皇藤原の惠美押勝又は道鏡法師が事などに、みだりなることましませば、向後返答申すまじきとて、それよりして神勅はとまりしなり。されども猶朝家に重きことある時は宇佐へ使を立てらる。又代の始にも使立てり。ここは代の始の事歟、又唯の時の事歟。　愚　筑前の國宇佐の八幡へ一代に一度勅使をたてまつらるる事あり。此男かの使を承りて、つくしへ下りけるなり。　肖　御代に一度奉幣の使あり。ここにかけるは清和御代なり。貞觀のはじめにや。

一ある國の　道すがらの國なるべし。中國たるべし。

一しそうの官人　しそうは祗承也。職掌の官の下に、しそうの官いくたりもあり。まかなひなどをする者也。宇佐使にかぎらず、齋宮などにもあり。

稱　文字の心はうかがひうけたまはる也。宇佐使の時むまやむまやの事など下にて物申しつけしなり。さしもなき者也。國の人の中に勅使の宿にゐてまかなひする者なり。十人廿人もあるか、諸國にあるなり。

一女あるじに　本の家童子がしかとみむ爲に酌をとらせよといへり。

稱　業平我もとの妻が見むとてかくいへるなり。　愚　女あるじとは人の妻をいふ。かはらけとるとは酒をすすむるとて酌をとる事也。

一かはらけとりて出したり　宇佐使の祗承の官人なれば、異義に及ばざるにや。

一五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　五月まつといへりとて卯月とは心得べからず。橘は必ず五月にさく物なれば、花橘といはむとて、五月待つとおけり。本知りたる人といはむとて、昔の人の袖の香といへり。　稱　卯月の心とみるべし。或祕抄に、此歌は在中將小野小町と夫婦

にて常磐里に住する時、かれがれになりて後、小町は宇佐の長官祇承官人大江惟章が婦になりて宇佐に住する時、在原中將清和天皇の御時、貞觀十七年四月に宇佐の勅使にて下りたりける時に、小町ここにありと聞きて、女主にかはらけとらせよとて、盃を内へ入れたりければ小町いでたり。さかななる橘をみてよるるといへり。私云、橘につけて昔の人の袖の香といへること本據あり。日本紀六に、垂仁天皇九十年春二月庚子朔。天皇命田道間守。遣常世國。令求非時香菓。（香菓此云二箇倶能未一）今謂橘是也。九十九年秋七月戊午朔。天皇崩於纒向宮。時年百四十歲。冬十二月癸卯壬子。葬於菅原伏見陵。明年春三月辛未朔壬午。田道間守至自常世國。則賫物也非時香菓八竿八縵焉。田道間守。於是泣悲歎之曰。受命天朝。遠往絶域。萬里蹈浪。遙度弱水。是常世國。則神仙祕區。俗非所臻。是以往來之間。自經十年。豈期獨凌峻瀾。更向本土乎。然賴聖帝之神靈。僅得還來。今天皇既崩。不得復命。臣雖生之。亦何益矣。乃向天皇之陵。叫哭而自死之。羣臣聞皆流涙也。田道間守是三宅連之始祖也と云云。此事をよめる歌顯注密勘に云、萬葉十八、

常世物この橘をいやてりにわが大君は今もみるかと

田道間守が袖につつみてもて來りしかば、昔の人の袖の香ぞするとよみたり。定家卿何の袖にても侍りなむ云云。又或鈔に、漢書云興芳七尺之廬橘といふ事ありといへり。猶勘て可記也。

一あまになりて　よからぬもののいひなしによりて、片田舍にゐておちぶれたる體を面目なしと思ふにや。肖　此時身をかへりみておどろく心也。尼になりて山にも入りけるにや。稱　女面目なく思ひて尼になりたるなり。愚　小町後に尼になりて、あふみの關寺のあたりにありけるを、山に入るといふといへり。なほたづぬべし。

一六十一つくしまでいきたりける　業平を見てこれこそ色好のすきものよといふを

一これはいろこのむ　是も宇佐使の事歟。

聞きけり。

一染川をわたらむ人のいかでかは色になるてふ事のなからむ　そめ川を渡りてきたるほどの人が、色にならぬはあるべからずといへり。色好といふを、さやうになくてはといふ心なり。愚　染川は筑前國にある名所なり。

一名にしおはばあだにぞあるべきたはれ嶋波のぬれ衣きるといふなり　色ごのみといふを、さはなしと業平陳せば又別にもいふべきに、色ごのみなりとうけがへるほどにおさへてよめるなり。そなたから好色とうつて出でていはば、させる色ごのみにてはあるべからず。たはれ嶋をよそにみれば、波のかくるが白絹のやうにみゆれども、近くみればさもなし。そなたの色ごのみと名にしおふはそらごとなるべし。たはれ嶋の白絹のやうなといへるが、さもなきが如くなるべしとなり。稱　さてはさのみの色好にてはなきとなり。愚　風流嶋は肥後國にあり。たはれじまといへばたはれ女のすむときこえたり。私云、ぬれぎぬとは萬葉に沾衣とかけり。ぬれぬれ衣は無名の事也。後撰の抄に、僞をぬれぎぬといふ事、昔は虛實をたださむ爲に、大和國天香具山にて、夏日かたびらをぬらして神樂をして見るに、すごさぬ人の衣はやがてひるなり。すごしたる者の衣はさうなくひぬ也。されば古歌に、

川社しのにをりはへ干す衣いかにほせばか七日ひざらむ

此歌にあらはれたり。雖然ぬれ衣のことは日本紀云、（私云、日本紀にあるべからず、續日本紀にてあるべし。）聖武天皇の御時佐野の近世と、いふ人、筑前守にてくだりたりしに、京よりぐして下りける妻國にて死にけり。さて其國にある女を妻としけるに、今の妻にむすめあり。又父が本の腹に娘あり。今の妻が娘はみめさまもわろくして、まま父ももてなさず。夫が娘はみめことがらすぐれたりければ、父これをあながちにもてなす。まま母此事をほいなく思ひて、まま娘を失はむと思ひて、たばかりて海人をかたらひていふ、汝この曉來ていふべきやうは、此京の姫君、このほどよなよな我もとへましましつるが、つりぎぬ

のぬれたるを盗みておはしつるたべといへとて、種種の財寶をとらす。蜑來りて約束の事なれば、其いふままに、曉聲高にいひければ、父これをききて腹を立ててゆきてみるに、娘ぬれたるきぬを引きかつぎねたり。これはねいりたるに繼母のきせたるなり。父やがて娘をころしけり。又或人のいはく、則ち蜑をもころされたりと云云。さて次の年、むすめ父の夢にみえていふ。

ぬれ衣の袖よりつたふ涙こそ長き世までのなき名なりけれ

ぬぎきする其たばかりのぬれ衣は長き憂名のためしなりけり

父此歌を夢にみて、さては繼母のしわざなりとて、妻をばおくりて出家遁世して、松浦山に住みけりといひけり。

一（六十二）おとづれざりける女　業平の方へおとづれざるなり。

一心かしこくや　媒のよさまに物をいひなすにつきてよそへ行くなり。

私云、此女利根ならぬ故、人のいふにしたがふこころなるべし。肖　あだなるべき人となり。

一もとみし人の前に　業平の前也。

一物くはせ　愚　食物のはい膳をしけるなり。

一いにしへの匂はいづら櫻花こけるからともなりにけるかな　我身は衰へて昔の匂はいづくへか行くらむ。花などをこきちらしたるやうになるとおぼゆるとなり。稱　これを女の上の事をいへるとみるはわろし。業平我身の上の事をいへるを、女のわが身の上の事に思ひて、はづかしく思へるなり。愚　匂はいづらは、匂をいづくへなにとなりたるぞといふ心也。

一これやこの我にあふみをのがれつつ年月ふれどまさりがほなみ　我にあふ事をのがれて年月をふる程に、思ひなほさむかと思へども、思ひなほす事もなきなり。我を思ふことのまさるかと思へども、さもなしとなり。女をあてにいひやるにみる義は、業平の性にあらず。肖　我にあふみを

のがれて年月をふれど、思ひなほすことなきとよめる也。業平の所を立出でたる女なれば、我を思ふ事のもとよりはすこしもまされるやと思へば、さもなきよしをうらむるなり。女をおどしてよめるにはあらざるべし。これ當流の本意也。業平は思ふをも思はぬも、けぢめみせぬといへり。

一いづちいぬらむとも知らず　或鈔に、物語の作者の詞也。

六十三

一世心つける女　世界へ心おほきやうなる義也。稱　好色なる心なり。年たけたる女なるべし。肖　嫁したる女の事也。

一まことならぬ夢語をす　見ぬ夢をみたりといふ心也。

一子三人　肖　古注には名をいへり。不用之。

一さぶらうなりける子なむ　愚　三郎にあたるむすこ也。

一けしきいとよし　歡然たり。

一こと人はいとなさけなし　三郎なる子の心也。我母をこと人にあはせむも思はしからず、在五中將にあはせたきと思へり。稱　業平は在原の五男なるゆゑに如此いふなり。私云、此事不審、業平は阿保親王の四男也。殊に第一の兄は大江音人とて在原氏にあらず。蓋了簡を加ふるに阿保親王の子、第一は三歳にて死給ふ。第二は五歳にて死給ふ。第三行平、第四守平、第五は業平也。此時は大江音人は他姓にみるべし。猶系圖の說說奥に委く注すべし。

一狩しありきけるに　業平の狩するなり。

一かいまみけるを　私云、端にいへるが如く、物ごしに業平をみけるこころなり。

一百年に一年たらぬつくもがみ我をこふらしおもかげにみゆ　あながち九十九といふ義にあらず、つよく年の老いたるといはむためなり。つくもがみは髪を短くして藻などのごとくなるをいふ。肖　九十九にはあらず。我心につかず、すさまじき女なれば、百年に一年足らぬほどの思のしたるなるべし。されどそれをも捨てぬところ、業平人をあはれむ情ふかき

なり。愚　つくもは海藻の名也。老人のかみのみだれたるをたとへていへり。

一いでたつけしき　業平のさらばいかむと出でたつけしきを、此女の見てむばらからたちにかかるもいはず、家ににげかへる也。愚　むばらは茨也。からたちは棘也。此女男の外へ出づるに、あはじとてあはててにぐれば、道もなき方へゆきて、むばらからたちにかかれるといふ也。

一男かの女のせしやうに　女の所へゆきて、女のせしやうにかいまみしたり。師說に云、せしやうは西城也。せんしやうと讀む也。

一なげきてぬとて　愚　ぬとはぬる也。古今集、

つれもなき人をやねたく白露のおくとは歎きぬとは忍ばむ

一さむしろに衣かたしきこよひもや戀しき人にあはでのみねむ　或抄に、この歌の心明也。

一男あはれと思ひて　肖　歌にて男女の中を和ぐる事みえたり。

一けぢめみせぬ　業平の性をかけり。人は好惡の別あるものなるに、業平はけぢめみせぬ人なりといへり。肖　切なるをもさもなきをも差別なく思ふなり。愚　けぢめは驗の字也。しるしみせぬ心也。

六十四

一みそかにかたらふわざも　愚　ひそかに語らふわざもせぬは、いづくにあるも知らず、あやしさに心を見むとて、歌をよみて女の方へやりたる也。

一吹く風に我身をなさば玉すだれ隙求めつついるべきものを　風はいづくにもすき間あれば吹き入る物也。我身を吹く風になさば、隙もとめて入りてみむものをといへり。

一とりとめぬ風にはありとも玉簾たがゆるさばか隙求むべき　隙もとめつついるべきといふを、おさへいへり。風は手には更にとられぬものなり。とりとめぬ風なりとも、玉簾のひまを、こなたがゆるしてもとめさせむにこそいるべけれといへり。

六十五
一おほやけおぼして　御門の御寵愛ありて召仕へる女也。愚　此女は典侍藤原直子といふ人也。染殿の后のいとこ也。稱　五條の后とも申す。肖　おほやけは清和の御門也。おぼしてとは寵愛し給ふなり。

一色ゆるされたる　禁色をゆるさるる也。稱　昔は男女にあり。大臣の子ども禁色をきる也。愚　御門の御氣色よくて色をゆるされたり。女房の衣にあやおり物などをきるは、禁色をゆるさるるといふ也。肖　三位に敍し給ふ事にや。此人は二條后也。

一おほみやすん所　染殿后也。

一いますかりけり　或鈔に、おはします也。

一あり原なりける男　業平也。ありはらとよめり。ありわらとよます。

一女がたゆるされたり　業平は好色のかたゆるされたりとふるくはとけども、ここは若き上達部の中に、女のある簾中に召入れて仕ふことなどゆるさるる事をいふ也。稱　好色の心にあらず、女中方へまゐる心也。宗祇も好色の事にいへり。

一女いとかたはなり身もほろびなむ　我身のためも然るべからず、又はそなたのためもいかがと諫めていへる也。愚　かたはは片輪也。女のきずになる心也。ほろぶるは身を失ふをいふ。

一思ふには忍ぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ　愚　いかに忍ばむと思へども、思ふ心のかつときは、えしのばぬなり。逢事にかへば、名をも何とも思ふまじきを、さもあらばあれといひすてたる詞なり。或鈔に、あふことにかへば、たとへ我身は何とならむともといへる心也。

一さうしにおり給へれば　肖　うへ局よりざうしに出、で給ふことなるべし。稱　さうし、さ文字すむ。ところによりて濁る也。局へゆく也。愚　曹司は女房の御つぼね也。

一れいのこのみざうしには　業平也。私云、前よりといひてといふ詞に、れ

いの此とつづけてみるべし。

一なにのよき事と思ひて　女の里へ行くこそよき事よと業平のおもへるなり。肖　業平また里へも行く也。愚　なにのは、うちふてたる心なり。

一つとめて　肖　後朝のやうにきこゆ。しかれどもさとは見えず、早朝にゆきたるにや。

一とのもつかさ　愚　主殿司の女嬬也。殿上などはきのごふ女官也。これはすけの里の事なれど、主殿司などわたくしの用にきかよふ也。道　此義をもと、ことの外に勞していかがみむといへり。后の里は長良の卿也。そこには主殿司はあるまじきなどいへり。ここはやすく心得られたる所也。昔は宿侍とて藏人頭以下雲客は皆殿上に宿直する也。殿上に夜は幕をかけて臺盤をとりのけて上臥する也。晝は幕をとりのくる也。此時業平の殿上にある體をして、女の里へ行きてあくる日とくかへる。主殿司のみるに、

殿上にある沓を奥へ投入れて、夜は此につめたるかほをしてゐるなり。かやうにみれば何のざうさもなきにや。

一くつはとりて　肖　しのびたる義にや。愚　中將はきたる沓を手づからとりて內へ投入れたるなり。のぼるは女の所へいるをいふなり。

一かくかたはにしつつ　愚　これより下は男の心をいふ也。

一身もいたづらに　肖　業平の身をかへりみたる也。

一おんやうし　肖　一段心をおこして祈る也。或祕鈔に、此陰陽師は天文博士吉備大明也。兩三日如此。

一かんなぎ　私云、みこ也。說文云、巫、祝女也。

一はらへのぐしてなむいきける　愚　祓の具は人形などやうの物也。賀茂川へはらへしにゆく也。

一こひせじと御手洗川にせしみ禊神はうけずもなりにけるかな　古今には不逢戀に入たり。或祕鈔に、此禊は貞觀十七年六月十三日也。是は男女

の中を離別する祭也。又相傳の祕鈔に、いのれどもくるしさのいよいよまされば、神をうらみたる心なり。

一此みかどはかほかたちよくおはしまして　愚　清和の御門の御事也。三代實錄に風姿甚美端嚴如神とみえたり。かたちはきらきらしくましましけるみかど也。又三寶に皈依し給ふ事も、よのみかどにすぐれ給へり。後には愛宕山水尾といふ所にて修行せさせ給へり。さて水尾のみかどとも申す也。

一女はいたうなきけり　肖　二條后みづから嗟嘆の心也。

一すくせつたなくし　愚　宿世拙きは前世の契つたなき也。

一この男にほだされて　或抄に、ほだし、羈此字也。物につながれたるこころ也。

一此男をばながし　愚　業平中將流罪の事國史に見えず。御門のいささか御氣色あしかりけるを、ことごとしくいひなしたり。或說に東山にこもりゐけるをかくいふといへり。　稱　此段にて業平流罪のことあらはなり。

一此女のいとこの御みやす所王女をばまかでさせてくらにこめてしをり給ふければ　愚　染殿の后御在所をまかでさせて、此女をおしこめておかれたるを、くらにこめてとはいへり。くらは物をこめおく所也。しをりとは人をいたましむる事をいふなり。道　ぬりこめなどの內におくなり。しをるとは折檻するをいふ。肖　奧ふかきやうなる所にや。

一蜑のかる藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば恨みじ　われからと音をなきて、世をばうらむまじきとなり。歌よまむ者は、此歌を心にもつべきことなり。ただ人はわれからと思ふ心あれば、怨を人にはかけぬものなり。　稱　この歌萬事に人の心得べきなり。　肖　上句は序也。此女も我心を思ひかへし、世はうらみじといへる心、尤ありがたきところなり。顯注密勘に、和布のりなどにつきたる小貝を、われからといふとかや。相

傳の祕鈔に、海中のもに蟲あり、則ち此蟲われからと鳴くといひ傳へたり。或祕抄に、或說には、此われからといふ蟲は、あまのもをかきあぐるに、藻につれてあがりて死ぬるなり。これは藻をこそかきあぐれ、蟲をとらむとはせぬに、我と此藻についてあがりて死ぬるやうにといふ也。又或祕鈔に、此歌は二條后の歌也、直子とは作者也。又は二條后はじめは直子、後に高子と云云。當流作名と相傳ふるなり。

一此男人の國より夜毎に　肖　當流の義は左遷の事定めらるといへども、いまだ都にありし時のことなり。左遷の所さだまるによりて人の國とはいふなり。愚　流されたるところよりくるをいふ。寔に流されたらは、たやすく其國をはなるべからず。是にてつくりごととはしるべし。

一聲はをかしうて　或鈔に、業平音曲の風流なるをいふ。

一あはれにうたひける　肖　詠吟なるべし。

一あなる　或鈔にあんなるとよむ。それにぞあるなると聞きしなり。

一さりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身をしらずして

業平の我にもしやあふとぞ思ひてするらむ。我身は此世にあるにもあらぬ體なるものをといへり。

一いたづらに行きてはきぬるものゆゑにみまくほしさに誘はれつつ

古今にあり。人丸歌也。肖　業平唯今我心にあたれば是をうたひけるにぞ。

一水の尾の御時　私云、天福本の勘物に、清和天皇鷹犬之遊漁獵之娛。未嘗留意。風姿甚端嚴如神性云云。定家卿の勘物と愚見鈔に後成恩寺の勘物少差別あり。猶追而勘て可決。肖　山城水尾に御隱遁と云云。御廟いまに其所にあり。

一おほみやすん所も染殿の后なり五條の后とも　私云、此詞は染殿の后の名を、五條の后とも申すといふやうに聞えたり。さにはあらず。染殿の后は良房公の女、五條の后は冬嗣公の女にて、良房公の兄弟也。然者二條の后

と五條の后とはをばめいなり。いとこにあらず。是また不審也。或人の鈔に、染殿の后を五條の后とも號すると云云。本據不慥也。

一津[六十六]の國にしる所　業平の知行也。

一あにおととと　業平兄弟五人あり。行平、守平、仲平、大江音人也。

一難波津をけさこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟　けさは今朝にあらず、今こそといふ心なり。船のなぎさにかかるもあり、蜑のれうするもあり、行くもあり、かへるもあり、ただはかなくうかぶもあり。これをみてよめる也。

一これをあはれがりて　稱　此歌をめでたる心也。

一せうえうし[六十七]に　前段のつづき也。愚　逍遙とかく遊ぶことをいふ。古今集第四の詞、かもの川原にかはせうえうしけるといふも川遊也。私云、逍遙の二字は莊子第一の篇の名也。林希逸が注に逍遙言優游自在也といへり。

一思ふどち　愚　おもふどし也。

一かいつらねて　愚　あゆみつらなれる心也。

一きさらぎばかりに　二月餘寒の時分也。私云、奥義鈔上卷に、きさらぎ、さむくて更にきぬをきれば、きぬさらぎといふを、あやまれりと云云。源概鈔に云、二月と、定家説に日本紀によめりといへり。

一昨日今日雲の立ちまひかくろふは花のはやしをうしとなりけり　折ふしもこそあれ、昨日今日雲の伊駒山をかくすは、此雪の面白く梢に見え、花の如くなるを、此花の林を惜みて立ちかくすかといへり。肖　かくろふはかくすなり。

伊勢物語愚案鈔 坤

六十八 一いづみの國へ　これも前段のつづきなり。

一住吉の郡　ただ住吉の濱をゆくとばかりかくは、餘情あるまじきに、住吉の郡、住吉の里、住吉の濱とおもしろくかけり。住吉の郡は今はなし。上古の名をかへたることおほきほどに、此物語の時分まではありしならむ。定家卿歌に、

けふぞゆく春の海邊の名なりけり住吉の里住吉の濱

宵　住吉の郡今は西生と號す。

一おりゐつつ　私云、ここにはとどまりてながめ、かしこにはとどまりてながめつつゆく心也。あながち馬車よりおり立ちて行くにはあらず。

一雁なきて菊の花咲く秋はあれど春の海邊にすみよしの濱　住吉に雁

なき花咲くをよむにあらず、世間の秋の景氣をいへり。世に雁なきて菊の花咲く秋はあれども、今春の海邊にすみよしの濱はなほまされりといふ心なり。　稱　これは住吉に雁もなかず、菊もなけれど、世間のことなり。春の海邊におきては、住吉に過ぎたるはあるべからずとなり。

一皆人よまず　肖　この歌を感じたる心にてやみたるなり。　愚　中將の歌に及ぶまじければ、みな斟酌したるなり。　道　感慨をおこして、此に及ぶもあるまじければ、贈答申さむにあらずとて、皆人人歌をよまざるなり。

六十九

一かりの使　此段事、題號の時述べたり。伊勢物語といふ題號にあはせむ爲に、此段を端にあめる本あり。是伊行が所爲也。用ひざる說也。狩の使とは、昔は諸國へ狩をさせむ爲に、勅使を立てらるること國史にのせたり。業平は今伊勢尾張の兩國の狩の勅使にゆくなり。異國にも巡狩とて、自身國國をめぐりてかりするは、其國の治否を見むためなり。此國も一任三年にて、吏務をもしつべき器にたへたるものに、國をもたしむるに、當任の者が何と國を治るぞ。又民も從ふかを見せむために、狩の使としてつかはさるる事なるべし。　稱　業平は今伊勢尾張へ雁の使をうけたまはりて下る也。國の民など緩怠なるかなどを見せらるべきために、內證は如此くださるるなり。小鷹いくもと、大鷹いくもと、犬いかほど、人數などといふ事國史にあり。

一齋宮なりける人の親　愚　怡子內親王は文德天皇の御女、母は正四位下名虎が女紀靜子といへり。惟喬の親王と同母也。清和御宇貞觀元年十月齋宮に立給ふ。十八年して伊勢を退出し給ふ。延喜十三年六月八日薨とみえたり。業平が子師尙といひしはこの齋宮の腹也。師尙は高階峯緒が子になれり。系圖などにも高階氏にかきたり。此いはれによりて、高階氏の人は伊勢の神宮にまゐらぬ事といへり。齋宮をかし奉りてまうけたる者の子孫たるによりてなり。　道　齋宮は怡子內親王也。惟喬親王と一腹也。其

齋宮の親は紀靜子也。されども此親をば染殿后とみるべし。齋宮の繼母也。繼母なれども齋宮を實子のやうにし給へり。肖　染殿に業平家禮なれば御詞のかかるなるべし。私云、逍遙院筆又愚見鈔等に怡子內親王と云云。本朝紹運圖には恬子內親王とみえたり。

一ねんごろにいたはりけり　京よりいへるとて、別して心をそへられたり。

一そこにこさせけり　愚　來らしむるといふ詞也。

一いたつきけり　愚　いたつくは勞也。我身の勞もいたつくといふ。又人の勞をいたはる心にもいたつくといへり。思ひいたつくなども人をいふ詞也。

一二日といふ夜　愚　月のついたち二日の事にはあらず。伊勢へ下著しての三日めをいへり。下の詞に月おぼろなるといへれば、月のある時分なり。

一われてあはむといふ　稱　わりなう逢はむ也。われても末にあはむとぞ思ふ、同心なり。かりの使はつねに春也。これ則ち二三月歟。古今には五月とあり。なにかもいらぬ事なり。逍　わりなくあはむといふ心也。肖　しひての心也。

一女もはたあはじとも　私云、天福如此。逍　幼き時より齋宮にて、夫婦のかたらひをも知りたまはねば、あふまじき事とも思ひ給はざるなり。肖　すき心にてあはじと思はぬにはあらず、うひうひしくて思慮なき也。このこころすゑにみゆ。

一つかひざね　稱　仁體也。肖　使器用となり。

一女のねやも近く　私云、天福の本如此也。又或人の本には、天福の本にねやものも文字なしといへり。逍遙院筆の本には、朱にてかく脇につけたり。逍　閨も近くとも、もの字あるもあり、なきもあり。

一ねひとつばかりに　愚　一時を四刻にわかちていふ也。

一男はた　師説に云、此はたは將又也。

一とのかたを見いだして　師説に、外の方也。

一月のおぼろなるに　狩の使は大略春二三月也。古注五月四日とある歟、しからず。肖　古注五月四日夜ならば子刻に月あるべからず、不用之。狩使も五月いかがと覺侍る。

一まだ何事もかたらはで　たしかに逢ひ奉るとかかず。されどもあひ申す事はありぞしつらむ。肖　實にあひたる事なれども、夢のやうなる心にてかくかけり。

一つとめて　私云、朝とくの事也。後朝の心もあり。

一いぶかし　私云、不審とかく。

一我人をやるべきにあらねば　肖　はばかりやすらひたる心也。

一君やこし我やゆきけむ思ほえず夢かうつつかねてかさめてか　君やこし我やゆきけむの二句のみなり。そなたがこちへくるか、我がそなたへゆくかと、此二句を下句にていひのべたり。私云、此歌古今集にて口傳の說ども　あるなり。

一かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ(よひと イ)さだめよ　君やこし我やゆきけむといへる事、我も何ともおもほえず、夢か現か、今夜あうてさだめよといへり。古今には、世人定めよといふ心なり。ここにも兩說をつけたれども、こよひはなほまされるなるべし。稱　今一度來りて定めよ也。私云、或冷泉家古今の鈔に、二條家には世ひとのひもじ濁りてよめりと云云。當流不用之。其證據には、此物語の第二段世人にまされりとある所ひもじ不濁、他流の說也。又此歌古今集にて祕說あり。

一國のかみ　愚　伊勢の國司にて、齋宮寮の頭かねたる人也。

一夜ひとよ酒のみ　饗應する也。

一もはら　專一にあひたてまつらむとする事もえせざる也。

一をはりの國へ　伊勢の狩は果てて尾張へゆくなり。

一血の涙　懇切の處をいはむとて血の涙とかけり。

一さかづきのさらに　或鈔に、盃の臺也。

一かち人のわたれどぬれぬえにしあれば　上の句ばかりかきたり。心は淺き緣といはむため也。一夜あひみたるを云。此等を連歌の起にするにや。

稱　かちひとのち文字すむべし。

一つい松　たい松也。續松也。松をついでとぼすほどに、つい松といふ。其きえ炭にてかく也。

一又相坂の關はこえなむ　またあひ奉る事あらむといふ心也。

一七十狩の使より　前と同時の事也。尾張國へゆきて、又伊勢國へかへる時也。

一大よどのわたり　伊勢と尾張とのみちなり。愚　名所也。

一わらはべに　肖　女童也。

一みるめかるかたやいづこぞ棹さして我に敎へよ蜑のつり舟　齋宮を敎へよといふ心なり。

今一度見奉らむことを我に敎へよといふ心なり。

わたの原八十島かけて漕出ぬと人にはつげよ海士の釣舟

と小野篁が配所へおもむく時よめり。物をとふことも、そこに熟したるものに問はずしては知りがたし。みる刈るかたを問はむならば蜑なり。

春日野の飛火の野守出でてみよ今いく日ありて若菜つみてむ

若菜はいつもえむと問はむならば、野守が案内者たるべきなり。

一七十内の御使　同じ狩の時のことか、又いつにても唯御使の時歟。

一すきごといひける女　稱　すきごと、こ文字にごる。愚　すきごとは數寄數寄しき事をいふ。此女は齋宮に祗候せる女也。

一千早振神のいがきも越えぬべし大宮人のみまくほしさに　神のいがきはこえむ事にあらねども、こえてなりとも業平をみたきといへり。いがきをこゆるは法度をこゆる心也。法度をこえてもみたきといふ心也。愚拾遺集人麿歌、

千早振神のいがきもこえぬべし今は我身のをしけくもなし

上三句同也。大宮人は雲の上人をいふ。中將の事也。

一戀しくばきてもみよかし千早振神のいさむるみちならなくに　戀しくばこなたへ來てもみよかし。神のいさむる道にもあらずとなり。天の浮橋の下にて、女神男神となりしより、神の制する道にあらずと也。

七十二 一伊勢の國なりける女　稱　是も齋宮の御事なるべし。肖　前段同事也。

一となりの國へ　愚　尾張の國也。

一大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな　大淀の浦に松のあるを、其本に波のよせかへりよせかへりするは、恨あるやうなれども、更に松はつらくもなしといふは、業平の我をいみじう恨みらるれども、我にうらみむ事はなしといふ心也。

七十三 一せうそこをだに　私云、せうそこは言葉にていふをも、源氏などにせうそこといへり。

一目にはみて手にはとられぬ月の中の桂の如き君にぞありける　月の桂を女に譬へていへり。肖　此歌も萬葉の歌にすこしかはれり。例の伊勢が作物語の意趣也。私云、萬葉四に、

目二破見而手二破不被取月內之楓如妹乎奈何責

七十四 一岩根ふみかさなる山にあらねどもあはぬ日多く戀ひわたるかな　千山萬水をへだつれども、心の通ふ道あれば逢ふことあり。我中には山川をへだてざれども、あはずして戀ひわたると也。

岩根踏み重なる山にあらねどもあはぬ日あまた戀ひわたるかも

右萬葉十一卷には如此あるなり。私に勘也。

七十五 一伊勢の國に　我身をひきゐていきてあらむとなり。肖　我心の我身をひきゐて也。いきてあらむとは伊勢にゆかむとなり。杜詩に此類あり。

東遊西還力實倦　從此將身更何許

一大淀の濱に生ふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども　みるか

らにといはむとて、大淀の濱に生ふてふとはいへり。心はなぎぬとは、心はなぐさみぬなり。かたらはざれども、みるばかりにても心はなぐさむといへり。稱　心のやはらぎたるをいふなり。愚　心はなぎぬは、心のはれたるをいふ。

一といひてまして　私云、とはいへど、つつみていまだうちとけざるこころなり。

一袖ぬれて蜑のかりほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

序歌也。みるをあふにしてやまむとするか。我心はみたるばかりにてはやまずとなり。

一岩間より生ふるみるめしつれなくば潮干潮みちかひもありなむ　みるは岩間より生ふる物なり。みるは緑にて不變物也。心だに不變に改まる所なくはたとあらば、人の心は變じかはるともよからむとなり。みちひる潮ののどけからぬをと源氏にもいへり。肖　我心つれなくて、思をする心なくば、人の心は變じかはるともよかるべきといふ義也。稱　しほは人の心の變ずるにたとふるもの也。

一涙にぞぬれつつしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか　我袖は潮のみちひにはぬれず、そなたのつらき心が袖のしづくとなりてしぼるといふなり。

一世にあふ事　愚　よには詞也。道　面白き題號也。肖　一度あひたりし後は、つひにつれなし。齋宮のすき心ならぬところここにてみえたり。一夜の契にて懷姙ありしもさるべき宿緣にや。

七十六

一春宮のみやすん所　東宮の母儀をいふ。肖　陽成院春宮の御時也。貞觀十一年、二歳にて立太子と云云。稱　文德天皇の御宇なるべし。

一氏神　大原野の社は閑院冬嗣公の、はじめて我氏の神春日を勸請申されたり。藤氏の后宮は必ず行啓あり。五條后順子のはじめて行啓也。愚　うち神は大原野神也。古今集第十七には、大原野にまうで給ふとかけり。大

原野神四座、春日御社と同體也。閑院左大臣冬嗣公のはじめて勸請申されたり。それより此方藤氏の后宮必ず行啓の事あり。三月の上の卯日、十一月の中の子の日祭の事あり。文德天皇の仁壽元年よりはじめて祭あり。其祭には藤原の后宮より行はるる事どもあるなり。肖　嘉祥三年に勸請也。爲王城守護云云。

一このゑつかさ　業平此時はまだ羽林にてはあるべからず、後に極官を記すによりてかく書く歟。作物語なれば何ともかくべし。愚　業平は貞觀六年三月左近衞權少將に任ず、四十の年也。

一車よりたまはりて　私云、車より祿たまはるべきこと先例不詳。蓋し車よりの下知にて祿を人人にたまはるなるべし。又作物語の心にてもあるべし。

一大原や小鹽の山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ　たけのあるゆゑなる歌也。東宮のみやすん所行啓あるほどに、天照大神と春日明神との契り給ひし相殿の昔を思ひ出すらむとなり。底には二條后のただ人の御時まゐり通せし事を、おぼしめし出すやといふ心也。神代とはもとの心也。人といはむため也。風の歌などはこれらぞ本なるべき。上ははたとして底に心をつけてみれば、心の深きところあるなり。江次第にも東宮行啓の所にのせたり。名譽にや。私云、大和物語に云、きさいの宮春宮の女御ときこえて、大原野にまうで給ひけり。御ともにかんだちめ殿上人いとおほくつかうまつりける。在中將もつかうまつれる。おほん車のあたりになまくらき折にたてまつりけり。み社にておほかたの人人祿たまはりて後なりけり。御車のしりよりたてまつれる、御ひとへの御衣をかつげさせ給へりけり。在中將たまはるままに、大原や小鹽の山も云云としのびやかにいひけり。昔をおぼしいでて、をかしとおぼしけり。

一心にもかなしとや　愚　業平御供にさぶらひて、御車のうち思ひやりて、ただならず思ひけるにや、誠は心のうちしらずかしと、物語の作者のい

へる詞也。

七十七
一昔田村のみかど　文德天皇を申奉る。愚　田村の御陵にをさめたてまつるによりて、田村の帝とは申すなり。

一女御たかきこ　愚　藤氏多賀幾子は右大臣良相の一女也、嘉祥三年七月に女御にたちて、天安二年十一月十四日に卒す。

一安祥寺　肖　山科にあり。愚　安祥寺は東寺の弘法大師の弟子、眞雅僧正たてられたる寺也。みわざは中陰の御佛寺なり。四十九日にあたりては、講おこなはれけるにや。

一人人ささげもの　捧物とて御願の時、宮宮、公卿、殿上人のまゐらするものなり。或はうち枝につけ、或は本の木の枝につくる也。

一ちささげばかり　愚　千捧也。

一そこばく　私に若干なり。あまたの心也。

一山もさらに堂の前に　面白くかけり。動せぬ山が、堂の前に俄にうごき出でたるやうなり。

一右大將にいまそかりける藤原のつねゆき　愚　藤原常行は右大臣良相の一男、女御の御せうと也。貞觀六年正月十六日三木に任ず。同八年十二月廿六日右大將を兼す。年卅一。いまそかりとは、是もみまそかりけりといふ詞同きなり。肖　此段貞觀八年以後の事なるべし。彼女御天安二年薨の說おぼつかなし、誤歟。私云、作物語の故也。

一右のむまのかみ　愚　業平貞觀七年三月に右馬權頭に任ず。

一目はたがひながら　目將かひをつくりながらなり。後成恩寺目はたがひながらとみ給へり。山のうごき出でたるやうにみえたるといふは、業平目はたがひながらなり。稱　めはたがひながらといふ說面白き也。但涙もうかびながらといふ心なり。

一山のみなうつりてけふにあふ事は春のわかれを問ふとなるべし　山もけふ別をかなしむなるべし。

一よくもあらざりけり　此等業平の自記とみえたり。今みればよくもあらず。其時はよかりしやらむ、人のあはれがりけりとなり。稱　これら業平自記といふ。私云、此次の定家卿勘物に若彼追善歟と云云。此詞以甘心也。女御卒して以後十年許して、常行右大將業平右馬頭等に任ずる也。

一七十八山しなのぜんじ　人康親王也、勘物にみゆ。愚　人康母は女御藤原澤子、總繼が女也。ぜんじとは、此時入道をば禪師といひけるにや。此親王の入道も貞觀元年也。女御の卒を天安二年といふ事あひかなはぬやうなり。私云、此段又作物語にておくべし。

一まうでたまうて　愚　常行大將山科の宮へまゐり給ふ也。

一よるのおまし　愚　おましは御席也。よるのねどころをまうくる也。

一出でてたばかり給ふ　愚　人をすかす心也。肖　思案し了見する也。或鈔に、たばかるは、分別してよく機嫌をはからひうかがふ心也。又世上をたばかるといふ時は、方便此二字をたばかるとよむ也。

一ただなほやはあるべき　肖　此石をいたづらに、其儘はいかでたてまつるべきの心なり。私云、此肖聞の說不可然、はじめてまゐりたる心ばへに、此石を奉るなるべし。

一三條のおほみゆき　清和天皇の西三條の百花亭へ行幸ありし事也。此行幸の爲に紀伊國の千里の濱の石をとりよするに、行幸以後到來するほどに、人の局の前にすておかれしなり。稱　ちさととよむべきかなれども、せんりとよみならひたる也。愚　常行の大將の父良相をば、西三條右大臣と稱す。肖　貞觀八年三月廿三日百花亭に行幸也。

一しまこのみ給ふきみなり　愚　山科の宮は石たて水ながす事をこのみ給ふなり。

一ずゐじんとねり　私云、大將はさだまりて隨身つかひ給ふ也。とねりは舍人とかく也。車などにも隨ふ者歟。

一聞きしよりは見るはまされり　物はききしよりは見劣りするものな

るが、此石は聞きしよりは見まされりとぞ。

一すずろなるべし　私云、第九段に注す。蕭韻會蕭字注云、蕭條寂寥貌也云云。

一みぎのむまのかみ　業平也。私云、朱にて勘物に右大將依御監右馬頭相伴歟と云云。白馬節會に白馬の奏にも時の大將の位署かきの上に御監とあり。左大將には左近衞の中少將をはじめ、左衞門、左兵衞、左馬頭助等皆眷屬也。右大將も同じ。其つかさどる官なるゆゑ、相隨ひてゆくなり。

一あをき苔をきざみて　愚　苔をきざみて蒔繪のかたに、石の上にふせたるべし。それに中將のよめる歌をつけて奉れる也。

一あかねども岩にぞかふる色みえぬ心をみせむよしのなければ　これにても滿足する事はなけれども、我心を岩にかへて見せ奉るとなり。肖かふるはあらはしみする心也。唯今奉る石に書きつけむ歌に、うつくしびれたるには不可似合やあらむ。愚　此岩は心にあかねども、色みえぬ情のほどを、みせ奉らむたよりのなければ、岩にかへてみせたてまつるよしなり。

一七十九氏の中に　在原氏の中に親王の生れ給ふ也。行平の女の腹に、貞數親王の生れたまふを申すなり。貞數親王は業平の甥にあたり給へり。

一御うぶやに　肖　三ヶ夜七ヶ夜などの祝に歌をよむことなり。

一御おほぢがた　貞數親王の御おほぢは行平也。行平方なる男とは業平也。

一わが門に千尋あるかげをうゑつれば夏冬たれかかくれざるべき　千尋の竹は仙家にあり。竹は空虛にして廉潔也。仙家の竹の千尋あるやうに久しくあらむといふ心也。夏冬は嚴寒炎熱にして人の苦痛なる時なり。夏の炎天にも冬の極寒にも、此陰にかくれば、愁なくして千秋萬歲ならむといふ心なり。稱　千尋は竹なり。肖　わが門とは在原氏の一門の事なり。

一これは貞數のみこ　肖　注也。

八十
一おとろへたる家　稱　業平の我家をさしていふなり。自記と聞えたり。

愚　中將の末つかたの事をいふべし。

一ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじとおもへば雨をばぬれつつといひ、藤をばしひて折りつるといひて、雨をも藤をもいはざるは、詞書に讓ればなり。彌生つごもりを、春はけふのみとよみては曲なし。春はいくかもあらじといへる尤面白し。或祕鈔等に、しひては志を深くしたるこころなり。又は切なる義也。又しひてといへるを俊成卿のめづるなりと云云。歌は唯一詞にていみじくもふかくもなるなりと褒美せると云云。又春の内にといへば言葉にしななし。年の内といひたるにて品出來たり。又此歌は紀有常がもとへつかはすとなり。肖　やよひのつごもりに、雨のふる日をりて人につかはす事、春をもしたひ、花をも愛し、人をも切に思ふ心なり。

八十一
一左のおほいまうちぎみ　勘物にみゆ。愚　源融は河原大臣と號す。

稱　融公は大納言より左大臣になりたる人也。珍しきことなり。

一賀茂川のほとりに　稱　六條川原も賀茂川の末也。さてかくかけり。

愚　河原院、東六條院といふところなり。

一うつろひさかりなる　紅などのうつろうて又盛なるもあるをいへり。

一ちぐさ　うすくこき也。肖　色色なる也。

一さけのみし　私云、此し文字詞の助也。

一かたゐおきな　かたくなる翁也。業平の自稱也。稱　これもなりひらの自記の心也。愚　かたゐは佳體の心にや、中將の事を國史、體貌閑麗なる由しるせる故也。

一いたしきの下に　天福本にはたいしきの下とあり。武田所持の定家卿自筆の本には、ここをすりていたしきとなほせり。然らば舊はたいしきとありし歟。舞臺などの下をたいしきといふ歟。此にいたしきといふは親王

上達部の下にありといふ心なり。末座にある義也。愚　下にはひありくは、みこたちにおそれをなしたる心なるべし。

一鹽竈にいつかきにけむ朝なぎに釣する舟はここによらなむ　ここを端的の鹽竈にしなして、我はいつ此しほがまの浦には來ぬらむ。釣する舟もここによらむとよめり。鹽竈に似たるなどよまざるところ尤面白し。山谷の鄭防が畫夾に題する詩に、

惠崇煙雨蘆雁　坐我瀟湘洞庭
欲喚扁舟歸去　故人言是丹青

と作れるに同じきにや。古今、

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

一みちの國にいきたりけるに　肖　此詞注也。みちの國にいきたるとは業平にあらず。誰人にても如此思へるなるべし。愚　我君のしろしめす日の本六十六州のうち、奥州の鹽竈にならぶおもしろき所はなきゆゑに、河原大臣も、浦こそ多けれ、此所をうつされたり。中將も奥州へ下りてみたるに、誠にならびなく思ひて、しほがまにいつかきにけむとよめるなり。業平みちの國迄下りける事ここの詞にみえたり。

一八十二これたかのみこ　勘物にみゆ。小野にましますによりて、後に小野宮と申す。愚　惟喬、貞觀十四年七月出家し給ふ。寛平九年二月廿日薨。

一みなせといふ所に宮あり。　別業をかまへたまへり。

一右のむまのかみ　業平也。

一其人の名忘れにけり　肖　伊勢が詞也。官位のいやしきをいたはりてかける也。王舍を出でて三代なれば、それともなき心也。愚　昔のことなれば、むまのかみなる人とばかりいひつたへて、實名をば知らぬとなり。つくり物語になしてこと更におぼめきたるなり。道　其右馬頭の名をさへ忘れたりといふ。業平の賤官をかくすにや。

一かりはねんごろにもせで　肖　其さま幽玄也。愚　狩をばなほざり

にして歌酒にかかりたるなり。

一片野のなぎさの家　肖　なぎさの院の事也。其院の櫻同所也。愚　河内國かたのになぎさの宮なぎさの杜などとてあり。私云、なぎさの岡と歌によめり。稱　きんや片野とて狩するところなり。

一かみなかしも　愚　上蔕、中蔕、下蔕の人ども皆歌をよめり。

一世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし　春になれば花はいつか咲かむと待つ心あり。はや咲きぬればそぞろにあくがれて、いづくの花にもと思へり。ややうつろへば風雨に心をいたましむる、これ皆櫻のあるゆゑなり。櫻花のたえてなくば春の心はのどかならむといへり。

一又人の歌　有常が歌也。肖　返歌とみゆ。

一ちればこそいとど櫻はめでたけれ憂世に何か久しかるべき　めでたけれは愛したけれといふ心也。ちるをこそ櫻の上にはことに賞翫すべけれ。浮世は皆盛者必衰のことわり也。其理をみするは花にありといふ心なり。稱　前の歌あまりに情に執著したるほどに、引きかへて如此よめる也。愚　めでたけれの詞今の世の歌にはよむべからず。

一御ともなる人　肖　誰ともなし。或祕抄に、平定文酒もたせいたりたる也。片野は定文が知行也。

一みこにむまのかみおほみきまゐる　業平酌をとるなり。

一かりくらし七夕つめに宿からむ天の川原に我はきにけり　ここのぬしは七夕つめにてあれば、日もくるる程に七夕つめに宿をからむといへり。肖　七夕つめはたなばた妻也。

一かへすがへすずし給うて　私云、或伊勢物語抄、遊遙院作奥書あり　ずしとは誦する也。吟詠也。

一かへしえし給はず　當座に倉卒に返歌をえし給はぬにや。又沈醉し給へる故にや。肖　有常は宮の御方の人なれば、返しをしたるなり。

一一年に一度きます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ　七夕は彦星にこそ宿をかせ、ただの人にはかさず。其彦星待つ所なれば、人に宿かす事はあるまじきといへり。

一十一日の月も　肖　折ふし月入るよし也。

一あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげていれずもあらなむ

これはみこの今ちとおはしませかしといふ心をよめり。山の端にげては俳諧のやうなれども、此時に臨みては面白し。今などよみてはよろしかるべからず。愚　月をみこに譬へてよめる也。

一おしなべて峯も平になりなむ山の端なくば月もいらじを　山の端にげてをあひしらひてよめり。ここには惟喬親王の歌一首もなし。歌は古今にもみえたり。

櫻花ちらばちらなむちらずとて故郷人のきてもみなくに

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ

これ皆彼みこの詠也。肖　心は明也。

一八十三宮に皈り給ふ　京の宮にかへり給ふなり。

一むまのかみ心もとながりて　肖　さまざまかやうにとどめ給ふをいかなるにかと思ふよしなり。

一枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくに　今夜は草枕を引結ぶことをもすべからず。秋の夜こそ長けれ、今はやよひつごもりなり。春宵一刻直千金なれば、いねずしてあかさむといへり。こよひの夜は秋の夜とたのまれずといへり。未到曉鐘猶是春と唐人も春を惜み侍るなり。

一おほとのごもらで　愚　おほとのごもるとはぬる事をいふ。寢所にこもる心也。

一御ぐしおろしたまうて　勘物にみゆ。愚　文德の第一のみこなれば儲君となり給ふべきが、清和の帝にひきたがへられ給へることを、思ひの

ほかなるといへり。私云、惟仁清和天皇第四宮　惟喬親王第一宮　位あらそひ常の事也。舊記勘に及ばざる也。

一小野にまうでたるに　小野はをはら也。ここに閑居してまします處へまゐるなり。

一雪いとたかし　肖　所のさま雪のふかかるべきなり。

一みむろ　おこなひし給ふ室也。弘法の南都にある時行ひ給ふ處を御室といふ。寛平法皇の仁和寺にまします所をも御室と申して、今に號するなり。

愚　入道してこもりゐる所をばむろといふ也。

一をがみたてまつる　愚　拜することなり。

一物がなしくて　肖　かかる所のさま大方の人なりともあはれなるべし。いはむやこのみこ、風流なりし君の世を背き給ふ心をよく工夫すべし。つれづれといへるうちに宮の身上こもるべき也。

一いにしへの　或抄に、もとみなせへ常にまゐりしが、今は山居して京中にましますこともなきよと、思ひつづけたるなるべし。

一忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは　忘れては夢かと思ひて、さらにうつつとはおぼえず。かやうに閑居幽間の御住居を、雪ふみわけて見奉らむとは思はざりしといへり。肖　業平此みこに、いにしへより心をよせ奉りて、水無瀬交野などの狩場にもしたがひ奉り、朝夕なれ奉りし事など思ひ、又位にもつき給ふべき君の、かく世をのがれ給ふ心このうちにこもるべし。稱　此段をよみてはかならず堯孝は落涙せしとなり。

一身はいやしながら　肖　卑下の詞也。

一母なむ宮なりける　愚　業平の母伊豆内親王は桓武の皇女也。故に宮といへり。

一ながの岡　稱　西京也。

一子は京にみやづかへ　業平朝家に奉公也。肖　清和御時也。

一しばしば　私云、しばしばは數の字也。

一ひとつ子　愚　中將兄行平、守平、弟の仲平なども同胞にてあれども、とりわけ中將をいとをしく母の思ひたまへるによりて、ひとつ子とはいへり。一子の思をなせる心なり。道　業平は兄弟五人也、行平、守平、仲平、大江音人也。阿保親王の子は多けれども、伊豆内親王のためには業平は一子也。私云、本朝紹運圖には行平母伊豆内親王、業平母同行平とあり。音人、守平、仲平、此三人の母誰ともなし。愚見鈔の說、惟清抄の說等不審猶勘て可決也。

一かなしう　私云、憐愍のこころなり。

一とみの事　とみは急事也。肖　俄なる事也。病などを告げしにや。愚急ぎたる事をいふ也。或抄に、頓なる事といふ儀あり。

一老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君かなさらぬ別は無常のならひなり。一たび寂滅はなくて叶はざれども、老いぬればことに賴まれぬ程に、いよいよ見まくほしきといへり。或祕抄に、貞觀十年十二月の事也と云云。

一世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため　我身一つの上へはかけずして、世間へかけていふ也。世に生死のなくもあれかし。一切衆生の子たる者のためにかからむといへり。此内に我も卽ちこもれり。

一八十五わらはより　惟喬のわかくましまし時より、業平のつかへ申さるるなり。惟喬に業平は甘ばかりまされり。稱　惟喬のみこの事也。業平のわらはの時ときこえたれども、是は惟喬のみこのわらはの時也。業平よりも弟にてあるなり。

一ぞくなるぜんじなる　ぞくは俗人也。ぜんじは法師也。稱　出家したるとなり。

一ことたつ　正月なれば引きつくろふなり。愚　ことたつはことにとてといふ詞也。たつは詞にまめたつまことたつなどいふが如し。

一こほつがごと　私云、如也。

一ひねもす　私云、長恨歌に盡日とよめり。

一思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわが心なる　思へどもとはつよく思ふ心なり。思へども思へどもといふ心あり。源氏に、思へどもなほあかざりし夕顔の、露におくれし心地を、年月ふれどなほおぼし忘れずといへり。ここにこのままもありたきと思へども、京に宮仕する程に、身をわくるならひなければ、いとまを申さむと思ふに、雪の降りて、京へかへさじと留るは、眞實ここにありたきと思ふ心のする事なりといへり。

稱　思へどもといふ五文字は、なかにおくにかはりて、五文字にはおく事、あさく思ふにはおくべからず。思へども思へどもと深く思ふ心によむべし。惟喬の宮を、如此業平舊好にて尋ね申すこと仁助ふかき心なり。

八十六
一なほこころざし　或抄に、女の親とかくいふによりて、互にいひさしけれども、又年頃へても、思ふ志あるによりて歌をやるなり。

一いままでに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまざま年の經ぬれば

そなたには忘れぞするらむ。我は聊も忘れずとなり。

一あひはなれぬ宮仕になむ　愚　同所の宮仕に出でて、常によそながらあひみるなり。

八十七
一蘆の屋のなだの鹽やきいとまなみつげの小櫛もささずきにけり　つげのを櫛もささずとは、磯ぎしはつげのをぐしとりあげて、髮などゆふことなきをいふなり。愚　萬葉三、石川少郎、

しがの蜑のめかり鹽やきいとまなみ髮梳の小櫛とりもみなくに

此歌をあしの屋の歌に書きなして、昔の歌といへるにや。但新古今集には、業平の朝臣とのせられ侍り。

一とよみけるそこの里をよみける　今の古歌によめるは、蘆屋の里をよめるとなり。よみけるぞと句をきらずして、よみけると切りて、そこの里とよむべしとなり。愚　此歌をひくは、あしの屋のなたといふ所のある證

據にいへる歌なり。

一なま宮仕　愚　なまなましき宮仕也。肖　時にあはぬ心なり。ゐなか住したるも同心也。

一此男のこのかみもゐうのかみなりけり　愚　在原行平貞觀十四年八月廿五日三木にて左衞門督に轉ず、五十七。

一其家のまへ　愚　詞にあしのやの里にしるよししてとあれば、中將の館なるべし。

一いさここの山の　愚　いさは友だちを誘ふ詞也。私云、沙山（いさごやま）といふ說當流不用之。

一その瀧ものよりことなり　愚　瀧のなりすがた何にもすぐれたるなり。肖　瀧をほめたる也。萬物にすぐれたるよしなり。

一長さ二十丈ひろさ五丈　孫綽が天台山賦に、かやうなる見どころを、筆のとどこほりなくかけり。今ここのかきやうも、ありありとして妙なるものなり。私云、遊天台山賦は文選の十一卷にあり。孫綽字興公といふなり。

一しらぎぬ　愚　瀧の水しらぎぬの如くみゆるなり。

一わらうた　圓座也。

一せうかうじくりのおほきさにて　愚　瀧の白玉が、小柑子栗などのおほきさなり。

一ゐふのかみまづよむ　肖　行平の事也。

一我世をば今日か明日かと待つかひの涙の瀧といづれたかけむ　あながち命の今日か明日かといふにあらず。行平のゐなかわたらひして、人數にもなく、おちぶれたる體は、今日か明日かと待つやうなりといへり。待つかひは待つあひだなり。涙と瀧とはいづれたかきぞといへり。涙の瀧とよむべきなり。肖　此歌は、在原氏の時代にあはずして、都にも隙ありて、かく田舍わたらひする事を思ひてよめり。我世はやたのむかたなきをいへり。稱　待つかひのか文字にごる人もあり。私云、稱名院はか文字すむと

いへるよし、水無瀬中納言入道俗兼成卿　口舌にて慥に相傳なり。その證據には古今の歌に、

櫻花咲きにけらしなあしびきの山のかひよりみゆる白雲

此歌をひきて、やまのかひといふも山のあひだ也。待つかひ同事也。山のかひとはにごりてよまぬなりと云云。師說には、かもじ濁りてよむなり。

一あるじ　業平也。

一ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに　此瀧の水精などを緒につらぬけるを、其緒をときてみだすやうにおつるなり。さやうにぬきみだる人こそあるらむとなり。下句はちと卑下せり。間斷もなくちるは、我袖のせばきには過分なりとなり。肖　述懷の心なり。或祕鈔に、人人は敏行、敏方、有常等也。貞觀四年也。また布引瀧なれば、織りたる心に、ぬきみだるとよめり。または水上に此玉の緒をときて、みだす人があるかとなり。又ちるかはちるかなる也。

一かたへの人　愚　わらふは歌のわろくておかしく思ふにはあらず、入興したる心なり。稱　のこりの人は嘲弄するやらむ、ほむるやらむよまず、自記也。

一此歌にめでてやみけり　これに上こす歌はあるべからず、ふしぎの瓦礫はいかがとてやみけり。

一もちよし　何たる者やらむ、系圖にみえず。愚　この人の家もあし屋の里のあたりにあるにや。

一やどりの方をみやれば　あし屋のなたの方をみやるなり。

一いざりする　私云、源概抄、廻嶋日本紀求食萬と云云。源概抄不審猶可勘也。

一はるる夜の星か川邊の螢かもわが住む方の蜑のたく火か　晴天の星か、又川邊の螢か、わが住む方の蜑の燒く火かといふ。稱　うたがひてよむはかやうによむべし。此か文字疑也。

一家にかへりきぬ　肖　あしやの家也。

一つとめて其家のめの子ども　愚　つとめてはあしたとくの事也。めの

こは女子也。

一女かたより　肖　業平の家の女中よりなり。

一たかつき　肖　高土器也。昔は土にてつくりしにや。私云、今も土にてつ

くるなり。

一わたつ海のかざしにさすといはふ藻も君が爲には惜まざりけり　わ

たつ海は唯海の異名にいふこともあり。又海神のことにいふこともある

なり。いはふは愛するやうなる心也。海神のかざしにして、祕藏する藻なれ

ども、今日都のまれ人には、惜まざるとなり。をりしもこそあれ、今この藻を

吹きよせたるは、君にまゐらせむためなりといふ心也。　愚　みるを藻と

いへるは、いづれも海藻なればなり。

一あまれりやたらずや　物には有餘不足あるが、此歌はいかんとなり。

愚　あまれるとはよきをいふなり。たらぬはあしきをいふなり。　肖　伊

勢が詞也。あしやなればゐなか人とかけり。批判する詞也。すこしはさし過

ぎたるさまなりと思ふ心にや。

一八十八わかきにはあらぬこれかれ友だち　中年に過ぎたる友だちなり。

一それが中にひとり　肖　業平也。

一おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの　大

方といふは、十のもの七つ八つといふ心也。人は物に著し貪するゆゑに、月

日の行くをも知らず、むなしく殘生を送るなり。しかれば月にもめでじと

はいへり。私云、めでしのし文字六條家などにはすみてよむなり。

一八十九いやしからぬ男　肖　業平也。

一我よりまされる人　肖　やんごとなき人なるべし。

一人知れずわが戀ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ

及びなき思ゆゑに戀ひ死なば、何たる神のたたりにて死にたるぞと、神に

なき名をやおほせむとなり。　肖　およばぬ戀路に、いたづらに心をくだき、つひにむなしくならむ跡までを思ふこころ、尤あはれ淺からず。

一九十　つれなき人を　なびきがたき人なり。

一さくら花けふこそかくも匂ふともあな頼みがた明日のよのこと　花は今こそかくにほへども、あすをば知らず。明日あはむといへども頼みがたしとなり。　肖　逢ひがたき人の、あはむといふを、うれしながらなほたのみ難き心をよめり。前の詞にて心あらはなり。　稱　あすのよのこと、事也。ことづけもすむ也。

一といふ心ばへもあるべし　心にはちとたのめども、頼みがたきと思ふ心もあるべし。　肖　上の歌の心を釋したる伊勢が詞なり。

一九十一　月日のゆくを　月日のゆくをば歎くべき事なるを、人生はらうらうとしてすごせり。此男は物思ありて、いつか其人にあふと思ふによりて、月日のゆくをさへなげくなり。

一をしめども春の限の今日の日のゆふぐれにさへなりにけるかな　肖　心明也。夕暮にさへといへるところ切に思ふべし。物思ふ身の上に、春さへくれゆく心を、ふかく思惟すべし。

一九十二　戀ひしさに　稱　女のあたりにゆきけれどなり。

一蘆邊こぐ棚なし小舟いくそたび行きかへるらむ知る人もなみ　たなし小舟は小き舟也。小舟をあしの中へこぎ入れたるは、よそよりはみえず。我思ふ人のもとへ行きてはかへりかへりすれども、人の知らざるは、棚無小舟を蘆の中へこぎいれて人の知らぬが如しとなり。　愚　舟ばたとて、舟の左右にゐんのやうなる板をうちつけたる物のあるが、小舟にはなき故に、たななし小舟といへり。

一九十三　身はいやしくて　肖　業平卑下也。

一いとになき人　一なる人也。愚　たぐひなき人といふ心也。　稱　うへもなき人也。たかき人をいふ也。

一すこしたのみぬべき　一向きれはなれざるやう也。

一あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高き賤しき苦しかりけり　天福本あぶなあぶなと聲をさせり。たとひ定家自筆の本たりといふとも、聲をば後人のさす事もあるべければ、必ず聲を信じがたし。まづここはあふ（ナ）なあふなとよみ來れる也。懇なる心也。なぞへなくはなぞらへなくといふ義也。懇に思ひはすべし。戀路はたかきいやしきになぞらへなく苦しきとなり。稱　おふなおふなと源氏によめる同事也。又誠といふ心歟。たかきいやしきはなずらへなき也。平等にくるしきなり。愚　思ひはすべしとは、思ふをば思ふべきといふ心なり。

一むかしもかかる事は　肖　今もかくあれば昔もと注せり。愚　戀といふ事は、たかきいやしきをえらばぬが、世のことわりにてありといふなり。

一昔男（九十四女イ）ありけりいかがありけむ其男すまずなりけり　業平の女を離別するなり。天福本には女の字なし。愚　女とあひずみせぬは、はなれたる心なり。

一後に男ありけれど　他人に嫁すれども、子ある中なれば、時時いひかよはすなり。

一繪かく人なれば　愚　ゑかく女なれば、本の男のかたより、ゑをあつらへたるなり。

一ろうして　禪閤抄に、嘲弄の弄とみたまへり。あざけりてよみてやるとなり。又は打ちあらはしてよむなり。漏の字の心也。稱　もらしてといふ說あり。これも意得られず。論じて歟。春秋をそへていへるほどに論歟。又てうろう歟云云。先もらすを用ふ云云。禪閤嘲弄云云おもしろし。又打ちあらはして、もらしてなり。肖　つつまずもらすなり。私云、ろうじてのし文字、漏、弄、此二字の時はすむべし。論じての時は濁るべきなり。

一秋の夜は春日わするるものなれや霞に霧やちへまさるらむ　秋をば

今の男にたとへ、春をばもとの男にたとふ。秋の夜は春日をば忘るるなり。當季に心のうつる趣也。霞は春のもの、霧は秋のもの也。霞には霧やまさるらむといふなり。我よりも今の男やまされるといふ心なり。　肖　此時秋なればなり。

一千千の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそちれ　秋を千あはせたれども、一の春には及ぶべからず。我は業平をこそ思へ、今の男をば思はずといひて、されども男の心は、いづれもたのみがたきこと、花や紅葉のともにちるが如しと也。　稱　今の男、千人にも業平をばかへまじといひて、但紅葉も花も一度はちるものなりと觀じてよめるなり。

九十五
一二條の后に　肖　業平は染殿にも二條后にも仕へけるなるべし。　稱　業平は忠仁公に家禮也。

一思ひつめたる事　日頃のつもれる思也。　愚　思ひきはめたる事也。しぢのはしがきかきつめての、つめての詞同じきなり。

一彦星に戀はまさりぬ天の川へだつる關をいまはやめてよ　七夕は年にまれなるちぎりなれども、その夜をたがへず必ずあへり。我はものごしにへだてて、直ちにあふ事なければ、彦星よりは戀はまさりてかなしきとなり。

九十六
一岩木にしあらねば　人非木石必有心。　愚　とにかくに心をつくして月日をへたるなり。

一身にかさひとつふたつ　六月の溫氣の折節艶にもなし、秋になりあはむといふ。　肖　身にかさなど我といへるは、契をいひのべむの心にや。

一いまは何の心もなし　私云、今はつれなき心もなしといへる心なり。

一秋まつころほひ　私云、異本秋たつころほひとあり。

一其人のもとへいなむずなりとて　業平のもとへゆかむとするなどいふ口舌也。　愚　思ひかけたる男のもとへ、此女はほかへいなむずる人にてあるよし、あなたこなたより告げしらせたるを、口舌とはいふなり。

一さありければ　私云、さやうにありければといふ詞也。

一せうと　私云、せうとは兄弟也。

一かへでの初紅葉　もみぢせむ時分にあらず、されど早く色づくもある物なれば、さもあるにや。

一おこせたり　私云、おとどひの所へつれていきたるゆゑ、女のもとの住家へおこせたるなり。

一秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ　秋風吹きたちなむ時にあはむといへるが、さもなきをいふ。木葉ふりしくえとは淺くなる江也。緣によせてよめり。愚　秋風吹きたちて、必ずあはむといひしかども、思のほかに外へ行くは、いひしやうにもあらぬなり。されば秋かけてといひしことは、ただ木葉ふりしくえにてこそありけれとよめるなり。

一かしこより人おこせば　上におこせたりとあれど、其時やるにはあらず、やらむとてかきつけて置きて、便あらばやれといひておく、それを今おこせたり。私云、此それを今おこせたりといふ詞不審、上の詞のおこせたりといふところに、愚案の說かきつけし。

一けふまでしらず　愚　かくかきおきて女はいにたるを、けふになるまで知らぬとなり。肖　業平の知らぬなり。

一よくてやあらむ　よきさまやらむ、あしきさまやらむ、また何たる所にあるやらむ、行末も知らず。

一あまのさかてをうちてなむのろひをる　後成恩寺の抄に、地神第四代彦火火出見尊、兄火闌降命の釣ばりを失ひたまひて、海中にゆきてとりてかへり給ふ時、海神の敎に、さまざまのろのろしき事をいひつづけて、此釣針をうしろ手になげかへし給へとありしを、其敎の如く、火火出見尊のし給へり。これよりして、人をのろふとて、手をうしろへやりてたたく事あり。其事をあまのさか手うつとはいふと注し給へり。さもありぬべし。師說に

は海人のかつぎしに海底へいる時、さかさまになりているとて、手にて浪をうつてゆくなり。いきをもえせず苦しきこと也。業平の思の切なること、あまのさか手をうちて、千尋の底にいるやうにあるをいふ也。のろひをるとは、其人を切に恨むをいふ也。愚　あまのさかてうつとは、人を呪詛する事をいふ。地神第四代彦火火出見尊と申す神のこのかみ火闌降命と申すおはしけり。此二の神さちかへをし給ひし時、此神の釣針を失ひ給ひしを、それかへしたべと、なほざりならずせめ給ひしかば、もしやと海のほとりを尋ねありき給ひし時、しほつつの翁といふ神のはかりごとにより、海の宮へ入りたまひて、やうやうとつりばりを尋ねいだして、兄のみことに返し給ふ時、海の神の教によりて、さまざまのろのろしき事どもをいひつづけて、うしろ手にて針をなげ與へ給ひし事あり。くはしく日本紀の第二の卷に見えたり。かかる事のおこりよりはじまりて、人をのろふとては、手をうしろへやりてたたく事ありとかや。それをあまのさかてうつとはいふ也。定家卿ここの詞をとりてよめる歌、

おのれのみ蜑のさかてをうつたへにふりしく木の葉あとだにもなし

一むくつけき　業平のわがのろひ事を、われとむくつけきといへる也。女はよわき所あるものなれば、おぢてかへりあふことやあらむと思ひていへるなり。此物語は狂言又いやしき事などをいへども、詞花言葉を撰ぶといへれば、うちのべてよみて、そこに心をつくべからず。但人の所好にしたがふべきか。愚　これより物語の作者の詞也。むくつけきは蠢の字をかく。むくむくしきなどいふは、おそろしき事をいふなり。のろひごとはおふものか、おはぬものか、此人をためしにてみむといふ也。

一堀川のおほいまうちぎみ　勘物にみゆ。

一四十の賀　堀川の大臣の家九條にあり。愚　昭宣公の四十の賀は貞觀十七年三月の事也。業平は元慶元年に右近權中將に任ず。此時にはいまだ中將とはいふべからず。然れども後の世には、業平の中將とのみいひつ

けたれば、かやうの物語なども、後にかくものなれば、中將なりける翁とはいへるなり。

一さくら花ちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まがふがに　いづくもかきくもりて見えぬやうにあれ、今老の來るべき道のまよふやうにとよめりがにといふかの字、今日の御賀の賀を自然にもたせてよめり。俊成卿定家卿も自然により來れるが面白しと評せしとなり。稱　四十は老のはじめなり。さてこそ老らくのこむといふとなり。或祕抄に、老らくとは、老字にかなをよみつけたる詞也。戀といふをこふらくはなどいへる類の詞也。顯注密勘にいはく、ちりかひくもれとは、ちりまがひくもれといふなり。夏と秋とゆきかふ空とよめるも、行きちがふ空とよめる心なり。まがふもちがふも心は同歟。がにといふ詞ばかりといふ心也。

一九十八おほきおほいまうちぎみ　忠仁公也。愚　白川太政大臣とも、又染殿のおとどとも申す。忠仁公はおくり名なり。

一つかうまつる男　業平也。忠仁公に家禮也。

一つくり枝に　肖　鳥柴の心也。

一わがたのむ君がためにとをる花は時しもわかぬ物にぞありける　作枝をよめり。今なが月は、梅のあるべきにあらざれば、時しもわかぬといへり。ときしもと雜をかくし題によめり。古今には讀人不知の歌にて、前太政大臣忠仁公とす。忠仁公の詠草などにあるを見て、拙入ておくか。稱　古今には忠仁公歌と入たり。此物語には業平也。自然面白き歌とて、手ならひなどに、忠仁公の書き給ふをみて、忠仁公の歌と心得て古今に入たる歟。相傳の祕鈔に、五文字を改めて、雜と歌とを忠仁公のみかどへ奉らるる時、叡感ありと云云。　私云、此義にて忠仁公の歌と云云。

一九十九右近の馬場のひをりの日　ひをりの事和歌の一の難義とて、祕するやうにいへども、又祕すべき事にもあらざるか。毎年五月にあら手つがひ、まてつがひとて、左右近衛が二度馬にのりて弓いる事也。三日は左近のあら

てつがひ、四日は右近のあらてつがひ、五日は左近のまてつがひ、六日は右近のまてつがひ也。これをひをりの日といふは、まてつがひの時、とねりども褐をひきをりてきるほどに、ひをりといふ也。あらてつがひも同體なれども、それはそと儀式ばかりなれば、まてつがひをひをりといふ。賀茂の足そろへはそとして、競馬はしきしやうを用ふるが如し。　愚　年毎の五月に、左近右近の馬場にて、近衞の舍人ども馬にのりて弓を射ることあり。三日は左近のあらてつがひ、四日は右近のあらてつがひ、五日は左近のまてつがひ、六日は右近のまてつがひなり。それをひをりの日といふは、まゆみのまてつがひの時、とねりども褐をひきをりてきるゆゑに、ひをりとはいふなり。あらてつがひにも同じ姿なれども、それはかたのやうの事にて、まてつがひをむねとしたれば、其日をひをりとはいふなり。右近のひをりは五日の事なるべし。又左右近の馬場におとど屋とて、近衞中少將の著座する所あり。業平おとど屋につきて、女のかほの、車の下簾よりはづれたるをみけるにや。但それはほど遠くてよくもみゆべからず。又歌をよみかはさむ事もいかがとおぼゆるうへ、大和物語には、その日中將見物に出でたるよしみえたり。それはさてもありなむ。　肖　右近馬場、一條大宮より東は左近西は右近。　稱　定家說用、かちといふ物隨身の著物也。その裙ををりたるをいふ也。或祕抄に、日折の日は內侍所の祭也。此時は貞觀七年三月十二日也。向に立てる車の女は、西三條右大臣良相公の娘、染殿の內侍也。後に業平の妻になる、滋春母也。私云、右三月十二日說不審。

一たてたりける車　　肖　昔はひをりの日人人見物しける也。

一みずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日や眺めくらさむ

はづかに見たるばかりなれども、其人を忘れがたくは、あやなく今日やながめくらさむとなり。　肖　一二句はただほのかにみたる心也。かくはづかにみそめたる人、忘れがたくばあぢきなくながめくらさむといふ心也。

稱　あやなくはよしなき物思也。又みずもあらずは見たか見ぬかの樣也。

愚　あやなくといふ詞は、かひなくまたやくなきなどいふ心也。或祕抄に戀しくは、み初めてあはれと思ふ人のなほ切になりゆかばの義也。あやなくはあぢきなく也。又或祕抄に、下すだれより見たる事なれば、一向にみずともいふべからず、又ほのかなればこのままながめやくらさむと也。又戀しくはとはほのかに見しより、思はうちつけにあり。なほ切に戀しくなりなばの心なり。けふやとよめるは大やうに心得べし。今日ばかりの心にはあるべからず。

一しるしらぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそしるべなりけれ

知るとも知らぬともいひごとなし。戀路はただ思のみこそ知る人なれといふ。大和物語には此返歌別の歌也。されども此歌が本なればぞ、古今にはこれを入る也。稱　この返歌よろしきなり。私云、大和物語にいはく、在中將物見にいでて、女のよしある車のもとにたちぬ。下簾のはざまより、此女のかほいとよくみてけり。ものなどいひかはしけり。これもかれも歸りて、あしたによみてやりける。みずもあらぬみもせぬ人の云云とあればし女返

見も見ずも誰と知りてか戀ひらるるおぼつかなみの今日の詠や

とぞいへりける。これらは物語にてもあることども也。愚　大和物語は業平が子滋春つくれりといふ。或は花山院の御作ともいへり。

一後はたれと知りにけり　肖　後にあひたるよしなり。

一百後涼殿　清涼殿のうしろにあたれば後涼殿と號す。清涼殿とよむが、後涼殿とよみつけたり。はざまは御殿のあはひなり。愚　後涼殿は清涼殿の西にあたれる殿也。兩殿の間をはざまとはいふなり。

一やんごとなき　或抄に、すぐれて風流なる人也。私云、其品高き上臈を、やんごとなきといふなり。

一忘草を忍草とやいふ　忘草忍草一つなり。そなたには忘れたれども、忍ぶとやこたへむといふ心也。肖　業平の通ひまゐるところにや。問ひた

る心は業平の通ひしあたりをはや忘れぬらむ。されどもなほ忍ぶよしにて、したふとぞいつはりて答へむずらむといふ心也。

一忘草生ふる野邊とは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまむ　そなたには忘草生ふるとやみるらむ。こなたはいつも忍び申せば、後をもなほたのまむとなり。愚　此歌大和物語にもあり。二條の御息所の御方よりいださせ給ふとみえたり。

百一

一左兵衛督なりける　業平の兄也。良近、藤氏の系圖に見えず、實錄などにのるか。私云、辨官補任になし。定家卿勘物にあり。不審。稱　宗祇以下不知云云。近日實錄を慥に被見出也。まさちか女は更衣也。まさちかは大力の者也。世に被用たる仁也。愚　うへにありけるとは、行平雲客にてありし時、左中辨まさちか位次の上首にてありけるなり。

一まらうどざねにて　愚　客人の器也。

一あるじまうけ　稱　あるじまうけとつづけてよむ說あり。唯あるじのまうけをしたると切りてよむべし。肖　あるじは行平也。

一なさけある人にて　愚　行平朝臣をいふ。

一花のしなひ　藤のさきたれたるやうなるをいふ。催馬樂に青柳のしなひをみればとあり。柳絲をもしなひといへり。愚　しなひとはなはをよりつづけたるやうに、花のふさの長きをいふ。或抄に房。

一あるじのはらから　業平也。

一あるじしたまふと　行平の饗應ときく也。柴の辭、業平の自記ときこえたり。

一歌の事はしらざりければ　肖　卑下也。

一すまひけれど　愚　いやがる心也。

一さく花の下にかくるる人を多みありしにまさる藤のかげかも　忠仁公の榮花の一家一門に及ぶをよめり。肖　忠仁公の榮花の先祖にもこえたる心なり。

一などかくしもよむと　肖　其座の人人のとひける也。　愚　行平の朝臣の中將に問ひけるなり。

一みまそかりて　愚　ましましてといふ詞也。

一藤氏　私云、氏の字にごりてよむなり。

一みな人そしらず　愚　中將の返答をききて、みな人世におそれて、とかくの褒貶に及ばぬなり。又歌もあしからず、かたがたそしらぬなるべし。

一百二歌はよまざりける　稱　歌よむ人の心得べき事也。うたはよまねども、世間の事を思ひ知りたるほどに、まして歌をよまば思ひ知るべきなり。

肖　歌をよまぬとは卑下也。此詞をみるに、歌をよまむ人は、世のことわりを思ひしるべき事とみゆ。

一世中を思ひしりけり　ここをもて知りぬ。歌よまむ人は有爲無常を知り、世のことわりをも勘辨して、教誡の端ともなり、天下の治をもいたすべき事也。古今序に、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざらむとかけり。

人倫としては禮法道理を知らざるべけむや。

一あてなる女のあまになりて　私云、前に注する如く、あひにあうたる品をあてなるといふ。　愚　此女は齋宮のことなり。

一うんじて　愚　憤の字也。思ひいきどほる心也。世をうらみたるをいふ。

一しそく　親族也。次に齋宮と其人をあらはせり。もとあひたてまつれる中なれば、親族といへり。一夜の契によりて子をうみ給へり。師尙也。　愚　もと知りたる女にてあれども、ばかりて親族にてある人とかきなしたり。源氏にもいへる詞也。

一そむくとて雲にはのらぬものなれど世の憂事ぞよそになるてふ　尼になりて、世をそむくとて、雲風に乘りて世を外にする事はなけれども、さすが俗中にあるやうにはなし。世の憂事はよそになりゆくといへり。　肖　齋宮の世をのがれ給ふ心を、うらやむやうの心なり。

一百三まめにじちようにて　まめに實要とは、同じことをかさねていへるな

り。肖　業平の事也。愚　まめじちよう同じことなり。かやうの詞づかひ常にあることなり。まめなるによりて、中將をばまめ男といへり。私云、同じことをこゑとよみとにいふは、文選の像讀の類也。

一深草のみかど　仁明天皇を申奉る。愚　仁明天皇は崩御の後山城の深草の御陵にかくし奉るによりて、深草の御門とは申す也。中將此時に仕へし人也。私云、ふかくさのみかどとよます、ふかうさのみかどとよむ也。

一心あやまりやしたりけむ　前に良妻といふほどに、こころあやまりやといへり。稱　まめに實要といひたるに、又かかる事をするはいかがと、じちようにあたりていふなり。愚　中將あやまりて、みこたちのめしつかひける女に物いひける也。仁明御子は文德天皇光孝天皇などを申すなり。

一寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり勝るかな

ねぬる夜の夢とは、一たびほのかにあひてし事をいふ。ほのかにあひ見し夢をはかなみて、今まことの夢にや見むとまどろめば、いやはかなき事のまされるとなり。肖　ねぬる夜の夢とは、ほのかにあひみし事なり。あかぬ名殘をしたひて、もし實の夢にやみえむとうちまどろめる、わがことわざのはかなきを、いやはかなにもなりまさるかなといへる也。愚　此歌を戀の心にいはば、うつつに人にあひたる事をも夢といふべし。はかなさは夢も現も同じことなるべし。大方おぼめきてたしかならず、心あまりて詞はたらぬなどとは、かやうの歌をいふべきにや。

一さる歌のきたなげさよ　謙退の辭也。肖　卑下也。稱　業平みづから卑下の詞也。

百四

一ことなる事なくて　子細はなくて尼になるなり。肖　さして世をのがるべきふしなくて、尼になりたまふよしなり。愚　是も齋宮の事也。

一賀茂のまつり　稱　昔は一條大路さじきをうちて、上皇なども御覽せらるるばかりなり。近衛司などの體みごと云云。かざり車にのるなり。

一世をうみのあまとし人をみるからにめくはせよとも頼まるるかな

尼を海士によせてよめり。めをば海士の刈るものなればめくはせといへり。世をうしとて、尼になれる人ときくほどに、めくはせして、心をあはせよとたのむとなり。　愚　世をいとひて尼になれるを、世をうみの海人とそへたり。めくはせよとは俗に目くはしするといふ事也。心に思ふことを詞にいはずして、目づかひにてしらするをいふ。海の海士は、和布をくふによせてよめり。私云、めぐはせ此聲によむなり。

一これは齋宮の　私云、これはといふより、物語の作者の前を注してかける詞なり。

一みさして飯り給ふ　はづかしく思ひて、みさしてかへりたまふなり。

一百五白露はけなばけななむ消えずとて玉にぬくべき人もあらじを　しらつゆは消えばきえむともままなり。露は玉のやうにみゆるが、其玉をつらぬくものもあるまじきぞとなり。　肖　きえばきえよと也。玉にぬく人もあらじとは、露は玉に似たる物也。玉をばつらぬきもつ物なれば、それにそへて愛し用ふる人もあらじと、業平をいひはなつ心なり。

一なめし　及びなき人を、業平の思ひかけてなほこれをすてぬは、びんなけれども、志はいやましになるといへり。如此みよといへども、ただこれは、白露はけなばけななむといへるは、あまり存外には思へども、志はいやましになるとみべきなり。　稱　なめしは無禮也。　愚　無禮（なめし）とよめり。なさけなき心なるべし。　肖　びんなき事也。やんごとなき人を思ひかくる心也。

一百六みこたちせうよう　私云、みこたちは仁明のみこ常康親王、清和御子貞元親王、貞保親王などなり。御子此字にあらず、親子たちなり。　愚　古今集第五詞書に、二條の后の春宮のみやす所と申しける時に、御屏風に立田川に紅葉ながれたるかたをかけりけるを題にてよめる素性法師が歌をも同じくのせたり。いづれまことならむ。

千早振神代も聞かず立田川からくれなゐに水くくるとは　當位卽妙の歌也。立田川に紅葉のちりしけるに、波のところどころくくるは、神代にもかかる事はきかずとなり。神代には神變不思議はあれども、其時もかかる事はきかずといへり。首尾相應、言語道斷。　愚　くくるは潛の字也。あし、かも、鴉などの水をかづくをくくるといふ也。紅葉とはあらはさずして、紅に水のくくるを、神代もきかずとはいへるなり。　肖　業平歌には、心詞かけたるところなくいへるなり。私云、宗祇百人一首の注に、秋の暮また神無月などに、龍田川のながれもなきまで、ちりしきたる木の葉に、水はただ紅をくくりたるやうなる興を、神代にもかかる事はきかずといへるとなり。私云、ちはやぶるといふ事、冷泉家に、古今灌頂口傳の內七ヶ大事の第三にあり。當流にはあらざれども、口決ゆゑ其趣は注しあらはさず。其外說說あり。別に注す。

百七

一あてなる男　業平也。

一其男のもとなりける人　業平の妹也。初草の返歌せし人也。業平のねよげにみゆるといふ歌よみて、妹をけさうしたるといふ義は、さもなきといふは、此段にてみえたる事也。稱　いもうとけさうするといふ事、これにて更に實なき所みゆる也。不便に思ふ心也。

一內記にありける藤原のとしゆき　勘物にみゆ。歌よみなり。後撰の卷頭の作者也。一切經かきし人なり。　肖　敏行、貞觀九小內記、十二年大內記に任ず。

一よばひけり　私云、竹取にあなをくじりかひばみといふ事を、河海抄の玉かつらの卷の大夫の監がよばひとはいひけれといふところに引きて、竹取物語にいふ、よるはやすきいもねず。やみの夜に出でても穴をくじりかひばみまどひあへり。かかる時よりなむよばひとはいひける。

一ふみもをさをさしからず　文などかく事に長ぜざる也。　肖　いまだ手などよからぬ也。　愚　をさをさしきは優也、治也、長也。をさをさしから